

封印を継承する者たち (1)

——陶淵明「責子」を贋作した明末の数学者

次に掲げるのは陶淵明の詩「責子」です。

北海道倶知安高等学校数学科 原田 牧夫

責子	白髮被両鬢	肌膚不復実
雖有五男兒	総不好紙筆	
阿舒已二人	懶惰故無匹	
阿宣行志学	而不愛文術	
雍端年十三	不識六与七	
通子垂九齡	但覓梨与栗	
天運苟如此	且進杯中物	

「岩波文庫「陶淵明全集(上)」松枝茂夫・和田武司訳注 p.248~250」の訳は次の通り

白髪は左右の鬢を覆い、皮膚ももう皺だらけになってしまった。男の子は五人もいるのに、そろいもそろって勉強がきらいときている。長男の阿舒(あじよ)は十六歳にもなるが、無類の怠けものだ。次男の阿宣(あせん)はやがて十五歳を迎えようというのに、文章学問の道が好きでない。その下の雍(よう)と端(たん)は、ふたりとも十三歳だが、まだ六と七との区別もつかない。末っ子の通(とお)ももうすぐ九歳になるというのに、梨だの栗だのをねだるばかりだ。だがこれもまあ運命ならば、あきらめて、酒でも飲むことにしよう。

「年十三不識六与七」の箇所を「十三歳だが、まだ六と七との区別もつかない」としていますが、果たしてそうでしょうか。いくら勉強嫌いだからといって、十三歳にもなって「六と七との区別もつかない」はずはありません。「六と七との区別」は勉強で覚えるというより、生活・遊びの中で身に付いていくものだからです。じつは「識」には、「見分ける」という他に「悟る・気が付く」という字義もあるのです。「年十三不識六与七」の訳は、「十三歳にもなるのに、六と七とで(たすと)自分の歳になることすら気が付かない」と解するのが正しいはずですが。……父と子の会話の中で、「おまえたちが6歳の時に〇〇という出来事があったが、もうあれから7年も

たつのだなあ」と言う父の言葉に対して、「アレレ？ボク今いくつだっけ」と聞き返す子ども。アンボンタンな息子に深いため息をつく父……そういったのどかな情景を想起させずにはおかない、とても巧みな表現なのです。読み下すならば、「六と七とを識(し)らず」ではなく、「六と七を識(し)らず」が正しい。そういうわけで、この作品には、二×八＝十六 というかけ算以外に、十三＝六十七 という足し算も使われているわけですが、実は数に関する細工はこれだけではありません。以下に「責子」にみられる数遊びを紹介していきます。

本文中、数の箇所は次の枠のとおりです。

天	通	雍	阿	阿	雖	白	責
運	子	端	宣	舒	有	髮	子
苟	垂	年	行	已	五	被	子
如	九	十	志	二	男	両	
此	齡	三	学	八	兒	鬢	
且	但	不	而	懶	総	肌	
進	覓	識	不	惰	不	膚	
杯	梨	六	愛	故	好	不	
中	与	与	文	無	紙	復	
物	栗	七	術	匹	筆	実	

数は 二 三 五 六 七 八 九 十 の計8個が登場しています。

「雍端年十三」の「十三」は、位取りの表記に直せば「二三」です。このことから「雍端年十三」の「十」の一字に「十」と「二」という二つの意味を与えてみましょう。すると、この二つの意味を意識すれば、登場する数は、一 二 三 五 六 七 八 九 十 の計9個と解せます。ここで四の欠如を、「匹」↓「四」と変えて補ってみましょう。つまり「匹」を「四」の欠画表記(欠画文字の使用は、漢籍では珍しくはありません)のようにとらえなおすというウィットが潜んでいるのだ、と解してみるのです。

すると当然 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 と出揃います。つまり出揃うようにするために

① 「十」の一字に「十」と「二」という二つの意味を与える

② 「匹」↓「四」と変える

という二つの操作を勝手に行ったわけです。しかしこの二つの操作が、作者の期待通りのものであることが次のようにしてわかります。

いま、①と②の二操作を込めた形でテキストを再掲します。

天	通	雍	阿	阿	雖	白	上1	責子
運	子	端	宣	舒	有	髮	上2	
苟	垂	年	行	已	五	被	上3	
如	九	十	志	二	男	兩	上4	
此	齡	三	学	八	兒	鬢	上5	
且	但	不	而	懶	総	肌	下1	
進	覓	識	不	惰	不	膚	下2	
杯	梨	六	愛	故	好	不	下3	
中	与	与	文	無	紙	復	下4	
物	栗	七	術	匹	筆	実	下5	

テキストの横10行を順に上1〜下5としましょう。

上4では

二十九〓十一

十〓十と一の二義〓十一〓十一

上5行では

八十三〓〓十一

さらに下5行でも

四(匹)十七〓十一

です。さらに

上3行と下3行をあわせた形で
五十六〓十一

であり、一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 の総和である五十五が、見事に十一ずつに分割された配置になっていることがわかります。この十一という数は①の操作で登場した十と一という数と符合しています。しかしここまでの議論は次の2点において不完全です。つまり

(あ) 五十六〥十一については、他の場合と異なり、上3行と下3行をあわせた形となっていて、同一行の和ではない。

(い) ②に関する符号が何も得られていない。

では次に(あ)と(い)の解決策を考えてみましょう。(あ)を解決するというのは、つまりは、五十六〥十一の計算を同一行で行えるような手段を捜すことです。上3行の五の隣の「巳」は「巳(へび)」によく似ています。「巳(へび)」は干支の六番目です。であれば「匹」↓「四」と同様に

③ 「巳」↓「匹(へび)」

とするこゝで

「巳」↓「巳(へび)」〥六

つまり

上3行内で

五十六〥五十六〥十一

となります。この解釈はなんと**3つの符合**を得ます。

符合の一つ目は、動物である「巳(へび)」と「六」という数が関係づけられているということと、②において動物に関する「匹」が数「四」と関係づけられているということとです。

符合の二つ目は、もつと巧妙です。

五十六〥十一という上3行と下3行をあわせた形を、他の同一行の和に対抗させる手法は、上の五つの行と下の五つの行とを対比させるという意識に基づいているわけです。ここで、我々が数に関して着目した箇所を、上の五行と下の五行とで対比させてみましょう。

天	通	雍	阿	阿	雖	白	卍	
運	子	端	宣	舒	有	髮	卍	責
苟	垂	年	行	已	五	被	卍	子
如	九	十	志	二	男	兩	卍	
此	齡	三	学	八	兒	鬢	卍	
且	但	不	而	懶	総	肌	下	
進	覓	識	不	惰	不	膚	下	
杯	梨	六	愛	故	好	不	下	
中	与	与	文	無	紙	復	下	
物	栗	七	術	匹	筆	実	下	

今度は、下段で数に着目した箇所該当する上段の文字と、上段で数に着目した箇所該当する下段の文字とを太字で強調しています。いま議論した「五」「已」「六」の3文字に対応する太字は、上段の「年」と下段の「好」「故」です。「好」「故」の2文字は並んだ順にたどれば、「好故」つまり「故(しきたり)を好む」ということであり、これと「年」を合わせて考えれば、「年」に関する「故(しきたり)を好む」ということとなり、前述の干支「巳(へび)」||六、の登場と符合します。残りの3つの太字「無」「与」「与」については後述することとして、**三つ目の符合**を得るために縦の列の数の和を考えましょう。

終わりから第3列目の「雍端年十三 不識六与七」中では前述の通り上の十三と、下の六十七||十三とが一致します。このことは、縦の和をとるときには①のように考えずに、「十」は十のまま扱うべきだ、ということを示唆します。この列は上下あわせると

十三十六十七||二十六

です。一方3列目では、

「巳」↓「巳(へび)」||六
「二八」
「匹」↓「四」

が登場しています。詩の内容から考えて「阿舒巳二八」の「二八」は二十八才ではなく、二×八||十六才 と解するのは当然です。するとこの第3列では

という数が得られますが、これは先に述べた

十三十六十七〇二十六

と一致しています。

では最後に3つの太字「無」「与」「与」についてです。「与」は英語の and と同義。「与」の一字によって and this place つまり「与」のこの場所もまた、上段と下段の対比において注目されるべき場所であるのだ、という意味合いを与えられていると考えて良いでしょう。つまり「与」がこの箇所配されることで、上段と下段を対比する見方への符合となってはいるわけですが、では太字「無」の存在は何を意味するのでしょうか。

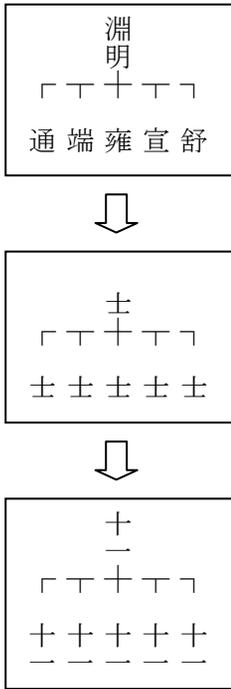
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 の総和である五十五は、見事に十一ずつに分割された配置になっていました。「十」個の数と「十一」による分割、というのはどうも格好悪い。しかし「無」〓ゼロであれば、「十一」個の数 〇 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 の和の「十一」による分割ということになるわけです。しかし「十」個の数と「十一」による分割では格好悪い」というのは、ここに至って作者が本当に〇使用の提唱をしているのだ、ということの論拠としては弱いと言わざるを得ません。じつは〇使用の提唱の符号は、我々の解読の端緒に潜んでいるのです。我々の解読は「十三」を位取り表記の「一三」に直すことから始まりました。そして**数の位取り表記が〇を必要とする要因の「一〇」であること**は、よく知られている事実です(たとえば「百」や「百一」を位取り表記で表すことを考えてみてください)。

下4と下5の二行において、いままでに注目した 無・与・与・匹・七 の五文字以外を横にたどると、

「復紙文中実筆術栗物」〓「復紙文中実筆術慄物」

「紙文中」つまりこのテキストの中には「筆術慄物」が「実(ぎ)っしりつまっている」である、と解せます。「筆術慄物」とは解くと戦慄がはしるような凄「筆術」ということでしょうか。つまり今までの結果意外にも他の凄い符合が潜んでいる、ということになります。以下でこのことについて探索していきます。

唐突ですが、説文解字(漢代)によれば「土」〓「十」+「一」です。「土」は男子。つまり「十一」〓「土」〓「男子」と解せます。「雖有五男兒」、つまり陶淵明には五人の男子の子がいます。そして彼も無論「男子」。つまり



このことは「無 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十」という「十一」個の数の和を五個の「十一」に分割する」とと符合します。さらに五人の息子のうち雍と端の二人だけが同い年、

つまり双子であり、テキストと一緒に登場していたわけですが、我々の五つの「十一」についても、上4においてのみ「十一」が二つ現れていました。この二つの「十一」はテキストの「十」に「十」と「一」の二重の意味を持たせることによって生じたわけですが、テキストの「十」の箇所である上4行を左からたどると、「如九十志二男両」です。この七文字を両端から中心の「志」に向かうようにたどってみましょう。七文字の中心「志」に含まれる「心」を、両端から中心の「志」に向かうようにたどれ、という指示と解してみるのがまず

「如九十志二男両」

において指示と解した「志」の下の「心」の部分を除いてみると

「如九十志二男両」↓「如九十士二男両」です。
さらに

「如九十志二男両」↓「如九十士二男両」↓「如九十士」+「士二男両」
↓「如九十士」+「両男二士」

「両男」とは、てんびんばかりでつりあうようにまったくおなじ、である男子。

「両男二士」とは、そっくりな男子が二つの「士」に該当する、と解せます。このことは雍と端に二つの「士」を充てたとする我々の解釈と符合します。さらに「如九十士」は、「如九、十、十一」、つまり

「士」＝「十一」

だ、ということと解せます。

つまり**双子の雍と端は二つの「士」に該当し、「士」＝「十一」であるという**こととなり、我々の**推察と完全に符合**します。「両男二士」と「士」＝「十一」に対する符合はもう一つあります。前述の第3列と第5列の縦計二十六に対して、その間にある第4列については

「志学」＝十五（歳）

のわけですが、（これは孔子の「志学」に因んだ表現であり、「好故」と「年」とに符合しています。）さらに十五を表す「志学」の「志」に含まれる「士」を「十一」と解することでやはり縦計二十六を得るという符合を得ます。この場合の二十六の得られ方は、他の2つの縦列の場合とは異なり

「志学」↓「志学」&（志）の（士）↓十五十一＝二十六

という、「志」に含まれるところの「士」の二重使用に依存しています。一見すると不規則にも思えるこの二重使用は、前出の「両男二士」の「士」が双子の「士」を表していたこととの、つまりは2人分の「士」を表していたこととの符合によって正当化され、整合性を得ます。

説文解字（漢代）にあつては、「志」＝「之」＋「心」であり、「士」＋「心」ではないことには注意すべきでしょう。しかし陶淵明の時代すでに存在した隸書の表記では「こころざし」

は「志」であり、彼が「志」↓「土」+「心」というウイットを得ることは可能です。また、「如九十志二男両」↓「如九十士二男両」に際して「志」に含まれる「心」が除かれたことは、前出の「復紙文中実筆術栗物」⇨「復紙文中実筆術慄物」において、「栗」↓「慄」としたのとも符合します。つまり「志」↓「土」において余った「心」が「栗」↓「慄」において使われているわけです。

ところで五人の子どもの名前には、次のような意味合いが隠れています。

舒 心中の思いをのべる⇨叙

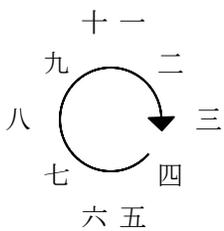
宣 述べる

雍 ふさぐ

端 はし

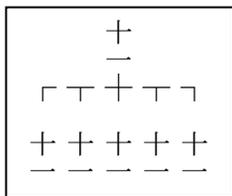
通 つらぬきとおす・すらすらと事がはこぶ・つかえることがないさま

雍・端は続けて読めば、雍端、「端をふさぐ」です。つまり「匹」↓「四」と「巳」↓「巳」に符合します。「匹」↓「四」の操作は、「二三五六七八九十」↓「三四五六七八九十」とする、つまりは「つかえることがないさま」にする操作でした。一方、「巳」↓「巳」の操作は、同一行での「五」+「巳」という足し算を可能にし、つまりは「すらすらと事がはこぶ」ようにした操作でした。しかし「二三四五六七八九十」では「つらぬきとおす」ことにはならず、さらに「端をふさぐ」ことが必要となったわけです。そして「一二三四五六七八九十」という「端をふさぐ」操作のかわりに、「二三四五六七八九十」、つまり「二三四五六七八九十一」という操作が行われた、というわけです。「端をふさぐ」操作が「一二三四五六七八九十」であったならば、結果として「一」と「十」という端が残ってしまいます。しかし我々の得た「二三四五六七八九十」すなわち「二三四五六七八九十一」では、「十」と「一」は一文「士」として強く結びついています。この強い結びつきは、我々の「二三四五六七八九十一」が単なる直線的な配列ではなく、



という輪の配列を示唆するものであったことを気付かせます。輪の形に配されることで、「端」は完全に消滅します。こうすることで「端をふさぐ」という操作が完全に遂行されたこととなるのです。

以上の完全な符合の中で、とりわけ注目すべきは、

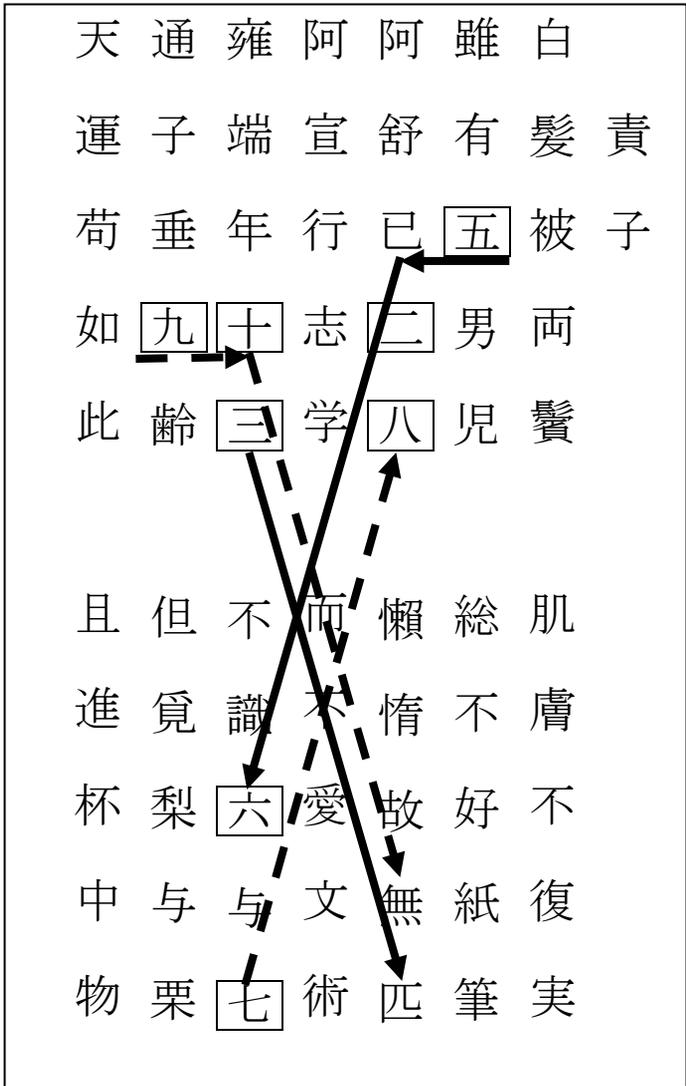


です。これは前述のとおり、「無 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十」ということと完

全に符合します。「責子」の作者が零に数としての市民権を与えるべきだと主張しているのは確かです。

0の意味合いを「無」として表記しながらも、0というモノを 一 二 三 四 五 六 七八 九 十 等の数の仲間を含めて扱う発想に作者は気付いていたことになりました。0にも数としての市民権を与えることで、位取り表記が常に可能になる、というのは前述のとおりですが、「責子」の作者が残した位取りの例は「十三」↓「十三」だけではありません。最初の「十」に「一」という意味を付加する操作において得られた「十一」は、「十」の右隣の「志」に含まれる「士」の姿と酷似しており、同様に「志」から「士」↓「十一」↓「一一」として得られた「一一」は、「志」の右隣の「二」の姿と酷似しているのです。「十一」と「士」、「一一」と「二」という2組は、横棒の長さの僅かな違いに至るまで符合しています。

実は注意深く数の配置を眺めることで「十」に対してその位取り表記「一無」（つまり現代の「一〇」）を対応させていることも次のようにして解ります。



右に再掲するテキストにおいて、「三」から順に数をたどることを考えましょう。

まず「三 四 五 六」を「三 匹 五 巳」としてたどることにしましょう。「五六」とせずに「五巳」とするのは、これら二文字が隣り合わせに位置するからですが、せつかくまともな「六」もあるのですから、「巳」に「六」を続けて「三 匹 五 巳 六」とたどってみましょう。「三 匹 五 巳 六」は実線の矢印で示したようにたどられます。では次に同様のことを「七」以降についても行ってみましょう。「七 八 九 十」を破線の矢印で示すことにしましょう。「三 匹」と「七 八」については、上下左右の見事な対称を得ます。また、「五巳」と「九十」についても行の違いこそあれ、左右対称の配置です。では、これらのことを手掛かりにして、「三 匹 五 巳 六」と同様に「七 八 九 十」についても、もう一字だけ延長してみましよう。「五 巳 六」と同様の形に「九十」を延長すると、右のように「九 十 無」を得ます。こうして得られた「三 匹 五 巳 六」と「七 八 九 十 無」について考えてみましょう。

「三 四 五 已 六」というのは、「匹↓四」「已↓已↓六」を意識しているわけであり、そう解釈することで「三 四 五 已 六」の最後の二文字「已六」は「六」が二つ続くものと見なせます。では「七 八 九 十 無」についてはどうでしょうか。「匹↓四」「已↓已↓六」は、「二 二 三 四 五 六 七 八 九 十」をすべて揃え、さらに行の和を十一に揃えるために行われた操作でした。これらの揃える操作の中で「十」を「十と一」として扱ったのを思い出しましょう。すると

「三 四 五 已 六」↓「三 四 五 六 六」

には

「七 八 九 十 無」↓「七 八 九 十 一 無」

が対応することになります。そしてさらに「三 四 五 六 六」の「六六」に対応するのは、「七 八 九 十 一 無」の「十一無」だということになります。「六六」が「六」の連続であることを考えると

「十一無」＝「十十」

つまりは、

「一無」＝「十」

という帰結を得るのです。「一無」＝「十」の提示に際して作者はなぜこのような手の込んだ方法を選んだのでしょうか。これほどの腕前を持つ作者であれば、もっと早い段階に提示するよ

うな設定が可能だったとしても不思議ではありません。
ゼロの概念を持たない読者にとって、「一無」＝「十」はいきなり提示されて理解できるものではないでしょう。作者は「一無」＝「十」を、「十三」↓「三」、「十一」↓「一」といった提示と、「無 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十」という十一個の数字という認識を経て初めて受容できるものと考えたのでしょう。聡明な作者は、我々の解説が段階的に進むものだと行うことを十分に承知し、活用してもいるのです。実際、「三 匹 五……」と「三」から順に進む以前に、「二」と「二」の連鎖については「二」の発生箇所から始まる

「十」↓「十一」＝「十」↓「二」＝「二」

が得られていたわけです。「七 八 九 十 無」に「二」が付加される際に「七 八 九 一 十 無」ではなく「七 八 九 十 一 無」となるべきであることも、この連鎖から解りま

す。
「一無」＝「十」を得た解説者にとって、十一個の数字「無 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十」のうちの「十」は不要になります。あるべき数字の個数は十一個から十個に減り、解説の端緒となった「十」↓「十一」は、新たな意味合いを帯びて「十一」↓「十」と回帰したかのようにも見えます。この時点で解説は一区切りを迎えます。

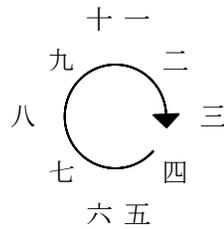
こうして〇にも数としての市民権を与えることで、位取り表記が常に可能になる、ということ

にも「責子」の作者が気付いていたことがわかります。「責子」が本当に陶淵明によって作られ、そして彼の生きた時代が西暦356～427年頃であることを前提とするならば、「〇」の「数遊び」の存在は彼の意外な側面を語るに留まらず中国の数学史においても、重要なことです。

田園での生活の中で、周囲に自分ほどの知識人が居るわけでもなく、また、零の使用による数の位取り表記を提唱してみたところで、然るべき地位の者たちの中にすらその値打ちを理解するほどの人物がいなかったのでしょうか。そうであれば自分の素晴らしい発案を詩に託したことにも納得がいきます。

「責子」の作者が「無」として記している数字は、今日では「〇」と記されます。しかしこの「〇」の表記は、陶淵明よりもずっと後になってからのようです。ところが実は我々は「無」⇨「〇」に対する符合とも解せるものを既に得ているのです。

我々が今までに出会った数は、「無」と「一」から「十一」までの数であったわけですが、既出の数の配置



においては、輪を形成するのは「一」から「十一」までの数であり（「十一」は完成された輪には含まれませんが、輪の配置を導くために「土」という形で登場しました）、「無」は含まれてはいませんでした。今までの解読を通して、我々が「無」を数として扱うこととなったのは、「一」から「十一」までの数によってであり、言うなれば数としての「無」は、「一」から「十一」までの数によって形成されたわけです。このことを念頭に置くと「一」から「十一」までの数が「輪」を形成することと、「無」⇨「〇」とが見事に符合してしまいます。この奇妙な符合は、「責子」が陶淵明よりもずっと後の、数「〇」が使われるようになった時代に作られたものである可能性を考えさせずにはおきません。陶淵明よりも後の時代も含めて考えるとき、「これまで見てきた「責子」の暗号の構造的な性格、つまり符合によって解読が段階的に進展するという構造が、陶淵明の時代から1200年ほど後に作られたBacon ⇨ Shakespeareの暗号（拙著『薔薇の封印』をご参照ください）の構造に酷似していることに気がきます。「解読者が同一であるため、解読者の個人的妄想の所産である可能性も考えなければなりません、そうではないことは理性的な読者であればすぐに納得ができるものと思います」。

先に得られていた

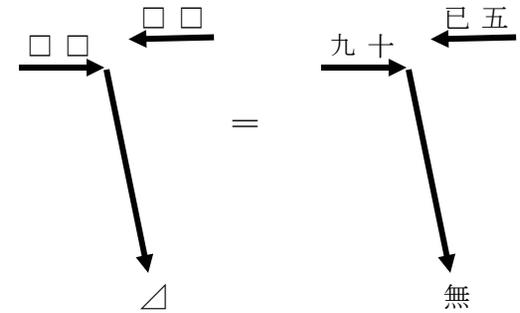
「三 四 五 已 六」⇨「三 四 五 六 六」
「七 八 九 十 無」⇨「七 八 九 十 一 無」

の二つに見られる微妙な差異に注目しましょう。「三 四 五 已 六」の最後の「六」が、「三 四 五 六 六」の最後の「六」にそのまま該当する一方で、「七 八 九 十 無」の最後に「無」は「七 八 九 十 一 無」の最後の数である「一 無」の半分にしかな該当していません。この意味における「九 十 無」の形態を「五已」の配置とともに記すと次の通りです。

「一無」を得た時と同様に、これらの「不」についても「数を順に数える」という操作を考え
てみましょう。4つの「不」の何文字後に数が現れているかを調べると

天	通	雍	阿	阿	雖	白	
運	子	端	宣	舒	有	髮	責
苟	垂	年	行	已	五	被	子
如	九	十	志	二	男	兩	
此	齡	三	学	八	兒	鬢	
且	但	不	而	懶	総	肌	
進	覓	識	不	惰	不	膚	
杯	梨	六	愛	故	好	不	
中	与	与	文	無	紙	復	
物	栗	七	術	匹	筆	実	

これとほぼ同一の形態がテキスト中の5つの「不」に認められます。正確に言うならば4つの
「不」と、「杯」にふくまれる半分の「不」です。



A 白髮被兩鬢肌膚

B 不復實雖有五男兒總
①②③④⑤⑥⑦⑧

C 不好紙筆阿舒已二八懶惰故無匹阿宣行志學而
①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱

D 不愛文術雍端年十三
①②③④⑤⑥⑦⑧

E 不識六與七通子垂九齡但覓梨與栗天運苟如此且進
①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑

F 杯中物
①②

BとCの「⑤五」と「⑧八」の一致は、番号と数の符号に気付かせます。さらに番号と数の符号を考える以上、ゼロを意味した「無」は除外して考えることとなります。「⑥巳」は、「巳」↓「巳」⇨「六」とも符号します。しかし「⑦二」と「⑬匹」については、一致していません。しかし「⑬匹」の⑬はDの「十三」と符合することに気付きます。Cの⑬をDの2文字「十三」に対応させるこの符合は、「十三」の番号である「⑦⑧」も一まとめにして扱うべきであることに気付かせます。すると、Dの連続する「⑦⑧」に対応できるものは、Cの「⑦⑧」しかありません。この対応は番号同士の対応になりますが、その結果として余るCの3つの数「二」「八」「匹」⇨「四」は、Eの「②」「④」「⑧」に丁度対応するという符合を得ます。

以上の結果として、Eの「六」「七」「九」が余ることになります。実はこの「六」「七」「九」が次の解読への手掛かりとなるのです。もとのテキストを「六文字・七文字・九文字」ごとに改行し直します。すると4つの「不」のうちの3つと「杯」とは、次の通り見事に横一列に配されることになるのです。

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩

白髮被兩鬢肌

膚不復實雖有五

男兒總不好紙筆阿舒

已二八懶惰故

無匹阿宣行志學

而不愛文術雍端年十

三不識六與七

通子垂九齡但覓

梨與栗天運苟如此且

進杯中物

「不」と「杯」の横並びは、先の「不」と「杯」への着目への符合となるのみならず、この新たな文字配列が横にたどられるべきである事をも示唆します。最後の列「進杯中物」だけが「六文字・七文字・九文字」の規則外であることから、この列が特別に扱われるべきであることも察しがつきます。

右上の「白」から横に追うと、

白膚男已無而三通梨進
を得ます。最後の「進」に当たったこの段階で、前述のとおり「進杯中物」を特別なものとして考えましょう。つまり

白膚男已無而三通梨

で一旦停止した上で、次に追う文字を「進杯中物」を手掛かりに考えます。「杯中物を進む」のではなく、「杯中物に進む」ことを考えましょう。「杯の中の物」を「杯」と同じ⑥に並ぶ3つの「不」に続く文字と解すと、⑥において右から順に「復」「愛」「識」を得ます。つまり

白膚男已無而三通梨復愛識

接続詞「而」に注意して解説すると

白膚男已無

而三通

梨復愛識

白い肌の男はすでに無く

そして三が通る

梨もまた知ることを惜しむ

『薔薇の封印』の読者であれば、これが何を意味するのかは、すぐに察しがつくでしょう。これ以降の解説の確実な理解には『薔薇の封印』の知識が不可欠です。」

「白膚男」＝「白人の男」↓「Francis Bacon」

「三通」＝「3が通説になる」↓「first folio」の完成年が（本当は1620年であるにもかかわらず）1623年であるというところが通説になる」

「梨」＝「pear」↓「William Shakespeare」

ということ。ただ注意すべきは、成句（白居易による）で「梨園」といえば演劇界のこと。つまり

白膚男已無
而三通

梨復愛識

(あの) 白人の男は既にこの世を去り
3が通説になってしまっている
演劇界もまた、秘密を明かしたがない

次に、⑥の「杯」と「不」以外の箇所を右から追うと

髮兒二匹子與

これでは意味不通。逆に左から追うと

與子匹二兒髮

(あの) 方は2人の兒の髮に匹敵する。

「與」と「匹」とから、「與子匹二」までは何とか意味が通じますが、「兒髮」は不通。「兒」とは、そもそも頭蓋骨がまだ合わさらないような生まれたての赤子のこと。「髮」の上部「髟」は、それ自体で長い髪を意味する文字。生まれたての赤子には長い髪はない。「兒」を「髮」から「髟」を取り除く指示と解せば「二兒髮」↓「二友」となります。「友」||「拔」||「抜きん出る」と解せば「二友」は二つの抜きん出た才能(の人)、つまりは2人の天才。

與子匹二兒髮

←

與子匹二友

(あの) 方は2人の天才に匹敵する

となります。⑥の「復」「愛」「識」以外も同様に左から追うと、「栗垂」は不通ですが、残りは

阿八總被

となります。この「八」を以前の「巳」↓「六」の逆操作によって「八」↓「未」とすると

阿八總被

←

阿未總被

ああ、まだ総てには及んでいない

を得ます。これは、この後も解説すべき箇所があるという警告。「栗垂」を保留の上で、「阿八總被」の下を見ると、「兩鬢」の2文字が「髟」と「2」に関する文字であることから、「二兒髮」に対応していることに気付きます。このことから、「兩鬢」の「鬢」について、先程と同様に「鬢」↓「賓」とした上で、「兩鬢」の配置を意識して、④⑥をまとめて縦2文字ずつ右から

追うと

兩鬢實雖不好懶惰宣行文術六與九齡天運

← 兩賓實雖不好懶惰宣行文術六與九齡天運

← 兩賓實

雖不好懶惰

宣行文術

六與九齡天運

「賓實」は成句で、「莊子」のいう「名と実」のこと。「兩」は対を成すもの。「兩賓實」とは、つまり「名実ともにある」ということ。「賓實」という成句の存在は、先の我々の「二兒髮」|| 「二友」の符号になります。

名実ともに(あり)

怠けることを嫌うとはいいが、(堅物であるわけではなく)

「文術」を広め、(また自らも)行い、

「六與九」の齡で天運(によって死去された)

「六與九」についてはさておき、この箇所は長く、しかもかなりの部分がそのまま読めます。「・・・天運」まで追ってさらに上の2文字も同様に右から追うと

垂栗

です。「栗」|| 「慄」は前出。

垂栗

←

将慄

いまにも身震いがくる

これは暗号設定の計り知れない精緻さに対する我々の意識を代弁したものだ。別の見方をするならば、作者の自慢です。つまり

いまにも身震いがくるでしょうよ

という意味。

「六與九」の齡は簡単に考えれば6+9=15歳。Francis Bacon は65歳で亡くなっており、五十年不足しています。すると、㊦の右端に「五」を、㊨㊩には、まとまった配置で、下から上に「十年」を得ることに気付きます。㊥を「五」から右へ追うと

五筆學端覓如

となり不通。一方、㊤㊦は「十年」から左に追うと
十年且此

これは2文字ずつまとめたままで左から追うことで

十年且此

←

且此十年

しかもこの十年

という自然なフレーズを得ることがわかります。㊤は2文字ごとに分離されており、「學端」と「十年」、「覓如」と「且此」はそれぞれ2つのまとまった配置を成していることに着目して、「十年且此」↓「且此十年」と同様に

五筆 學端 覓如

←

五筆 覓如 學端

とします。さらに間に挟まれた「覓如」のみを逆読みにする（この逆読みの操作は次に符合を得ることになる）ことで

五筆 學端 覓如

←

五筆 覓如 學端

←

五筆 如覓 學端

五つの著作は学問の端緒を探求するようなものだ

を得ます。先に得られた「且此十年」をこの前に据えることで、

且此十年

五筆如覓學端

しかもここ十年の五つの著作は

学問の端緒を探求するようなものだった

です。前出の「六與九」を「六十五」に直せば

兩賓實

雖不好懶惰

宣行文術

六十五齡天運

且此十年

五筆如覓學端

名実ともに（あり）

怠けることを嫌うとはいいが、（堅物であるわけではなく）

「文術」を広め（また自らも）行い、

六十五歳で天運（によって死去された）

しかもここ十年の五つの著作は

学問の端緒を探求するようなものだった

となります。この時点で残ったものは、①と②③の「阿舒」のみ。

④はすでに解読された⑤⑥の間に挟まれた位置にあります。先に間に挟まれた「覓如」のみを逆読みにしたのと符合するように①も逆読みにしましょう。つまり左から追う。

苟但七雍

志故紙

有肌

とりあえず7度だけふさいで

（あの方の）死亡を紙に記す

肌の有る

「七雍」の「雍」は前出の「雍端」、つまり「端を7回だけふさぐ」と解釈します。本来のテキストが10文字7列の配置であったことと、以前の「雍端」が、数の列を形成する操作に符合していたことを考えれば、

七雍

← 端を7回だけふさぐ

← 七列に記す

は容易に解ります。七列に記すことを「七雍」というのは、詩的であると同時にとても謙遜した表現ですね。ところが、最後の「有肌」は、前出の「垂慄」を考慮すれば、どうみても

有肌

←

有肌慄

です。「肌慄」は成句で、身震いすること。この箇所も、先の「垂慄」と同じ類のもの。

有肌
鳥肌モノだな

最後に残されたのは

阿舒
ああ本音を言ってしまった
です。

苟但七雍

志故紙

有肌

阿舒

とりあえず7列だけ

(あの方の)死亡を紙に記す

鳥肌モノだな

ああ言ってしまった

「七雍」という謙遜の後で、自分の「文術」を自慢して「有肌」とするのは、確かに「阿舒」ですね。

以上を続けると次の通り。作者の警告と自慢といった、モノローグ的な箇所は注目に値します。

①

白膚男已無

而三通梨復愛識

與子匹二友阿未總被

兩賓實雖不好懶惰宣行文術

六十五齡天運將慄

且此十年五筆如覓學端

苟但七雍志故紙有肌阿舒

(あの)白人の男は既にこの世を去り、

3が通説になってしまっていて、演劇界もまた、秘密を明かしたがらない。

(あの)方は2人の天才に匹敵する「ああ、まだ総てには及んでいない」。

名実ともに(あり)怠けることを嫌うとはいうが(堅物であるわけではなく)、

「文術」を広め(また自らも)行い、

六十五歳で天運(によって死去された)「いまにも身震いがくるでしょうよ」。

しかもここ十年の五つの著作は学問の端緒を探求するようなものだった。

とりあえず7列だけ(あの方の)死亡を紙に記す「鳥肌モノだな」「ああ言ってしまった」

こうして出来た文は、行の長さがまちまちですが、注意して並べ替えてみると次の通り見事に並びます。

2

白膚男已無
而三通梨復愛識
六十五齡天運將慄
與子匹二友阿未總被
且此十年五筆如覓學端
苟但七雍志故紙有肌阿舒
兩賓實雖不好懶惰宣行文術

この配列のモノローグの箇所を抜いて次のように追うと

白膚男已無
而三通梨復愛識
六十五齡天運將慄
與子匹二友阿未總被
且此十年五筆如覓學端
苟但七雍志故紙有肌阿舒
兩賓實雖不好懶惰宣行文術

3

宣如天梨男
行覓運
復已文學
愛無術端識

(あの) 演劇の天才の男について、公表すること
それには運が必要だ
再びもう文学(の潮流)は
暗号など含まないまともなものを
好むようになってしまっているから

「無術端識」は、つまりは暗号細工のされていないまともなもの、という意味。

この[3]まで規則的に解読できること自体が、[2]のそしてつまりは[1]の正しさの符合になります。さらに[1]の「荷但七雍」については、本来のテキストのみならず、[1]自体が7列を成していることに気付きます。さらに[3]の配置についても

宣如末梨男

行覓運

復巳文學

愛無術端識

[4]

愛無復術

巳行端文覓宣

識學運如天梨男

「行端文」は先へと進みながら文を正しくしてゆくこと。つまり一連の解読作業を指しています。「巳」はやめるという意味。「巳行端文」は解読をやめるということ。しかし「端」には、「正す」という以外にも「左右の均整がとれている正しさ」・「左右を水平にそろえて持つ」等という語義もあります。つまり「巳行端文」には、文字を水平に横に追う読み方をやめるという意味も含まれているのです。このことは、今まさに我々の解読が、水平に文字を追うものから斜め・追いに変わってきていることも符合します。さらに「解読をやめる」||「水平に横に追う読み方をやめる」と解すならば、このことは主要な解読の結果は[3]ではなく[1]なのだ、という主張をも含むこととなります。そしてこれは実際[1]と[3]の解読結果の重要性の違いと符合します。

愛無復術

巳行端文覓宣

識學運如天梨男

二度とは作り得ないこの文術を惜しみ

解読をやめて、公開の機会を捜し求めなさい

演劇の天才の男のように文学の流行を見極めなさい

「運」とは、めぐりあわせのこと。つまりこの「學運」とは[3]で「復巳(再びもう)」廃れた

とされた「文術」が、文学（の潮流）のめぐりあわせによって再び流行するようになるとき、それを見極めて波に乗れということ。自作を大ヒットさせたあの演劇の天才の男のように流行をつかめ、ということです。

最後に①の結果について吟味しておきましょう。

白膚男已無

而三通梨復愛識

與子匹二友阿未總被

兩賓實雖不好懶惰宣行文術

六十五齡天運將慄

且此十年五筆如覓學端

苟但七雍志故紙有肌阿舒

（あの）白人の男は既にこの世を去り、

3が通説になってしまっていて、演劇界もまた、秘密を明かしたからない。

（あの）方は2人の天才に匹敵する「ああ、まだ総てには及んでいない」。

名実ともに（あり）怠けることを嫌うとはいうが（堅物であるわけではなく）、

「文術」を広め（また自らも）行い、

六十五歳で天運（によって死去された）「いまにも身震いがくるでしょうよ」。

しかも「二十年の五つの著作は学問の端緒を探索するようなものだった。

とりあえず7列だけ（あの方の）死亡を紙に記す「鳥肌モノだな」「ああ言ってしまった」

「且此十年五筆如覓學端」つまりしかも「二十年の五つの著作は学問の端緒を探索するようなものだった」ということから始めましょう。

William Shakespeare が 1616 年に死亡したことになっている一方で、Francis Bacon の没年は 1626 年です。つまり彼は最期の十年間だけ、純粹に Francis Bacon としてのみ生きたことになりません。

「学問の端緒を探索するよつな」Francis Bacon の著作というのは、彼がライフワークとして企画した *Instauratio magna*（『大革新』）に関連する著作と解してまず相違ありません。The Cambridge History of English and American Literature の XIV. The Beginnings of English Philosophy の FRANCIS BACON の項に掲載されている Spedding (Francis Bacon 研究の権威の方です) による著作リストにおいて、*Philosophical Works* として分類されているものうちから、*Instauratio magna*（『大革新』）に関連する、最期の十年に執筆もしくは出版されたと考えられるものを調べてみました。ある作品の一部が改めて1冊の体裁で出版されている場合もあるようですが、主要なものを整理してみると、確かに次の5つに絞られます

- A *Novum Organum*（『ノーブム オルガヌム』） 1620
- B *de Dignitate et Augmentis Scientiarum*（『学問の発達（ラテン語版）』） 1623
- C *Historia Naturalis et Experimentalis*（『博物学と実験の歴史』） 1622
- D *Sylva Sylvarum*（『森の森』） 1627
- E *New Atlantis*（『新アトランティス』） 1627

B については、「此十年」以前に英語版が出版されており、またDとEは彼の死後に出版され

たものであり、Eは未完の作品です。とはいえ、これらを「五筆」と呼ぶことは確かに可能です。New Atlantisが未完であり、そしてまた *Instauratio magna* が未完で終わったことは、「阿未總被」が「責子」の作者のモノログであるのみならず、Francis Baconの最期の心境を代弁したものであり、さらにそれはFrancis Baconの死が「責子」の作者にとってどれほど深い悲しみを与えるものだったかを推測させずにはおきません。

Instauratio magna は、Francis Bacon 個人に留まらず、世界的に見ても「学問の端緒を探求するよつな」著作の代表的なものであることは有名です。また、「宣行文術」のうちの「宣文術」については、Francis Bacon による暗号研究もまた、有名なことです。「行文術」については『薔薇の封印』の暗号があります。『薔薇の封印』によれば、「三通」は *Novum Organum* に記された暗号でした。そして「與子匹二友」は無論William Shakespeare=Francis Baconと符合します。「梨復愛識」つまり「演劇界もまた、秘密を明かしたがない。」は、William Shakespeareの正体が謎に包まれていたことに符合します。

「責子」の制作年代については、Francis Baconの最期の十年間を「此十年」と記していること、さらにはFrancis Baconの死後1627年に出版された著作への言及から、「責子」が1627年頃につくられたことがわかります。

「六」「七」「九」という単なる3つの数の指示によって、漢詩の中に英国の文化が突如出現するのは実に驚きです。「責子」は漢字の世界。一方『薔薇の封印』はアルファベットの世界です。両者は一見無関係に見えます。しかし「六」「七」「九」の出現以前に得られた「責子」の諸結果の中にも、アルファベットと関係のありそうな事項が隠れています。解読の冒頭で幾度も得られた数の和「十一」が、結局は前半の解読のテーマのような数であったことを思い出しましょう。そして我々が「十一」以外にも「二十六」という数の和を3度得ていたことを思い出しましょう。テキストの5列目において

十三十六十七二十二十六

さらに3列目において

已二十八十四六十六十四二十二十六

さらに4列目で

「志学」↓「志学」&（「志」の）「士」↓十五十一二十二十六

の計3つです。この「二十六」という数が英語のアルファベットの文字数と一致することに注目しましょう。このことを抛り所として、テキストの第3列と第5列にまず注目しましょう。第3列と第5列において、以前に得られた数を、順番に従ってアルファベットになおし、もとの文字の左に記すことにしましょう。ただし「無」については0（ゼロ）の字形に従って、文字Oを充てておくことにしましょう。6に該当した二つの漢字、六と已については、どちらもFになります。

天	通		雍	阿		阿	雖	白	上 ₁
運	子		端	宣		舒	有	髮	上 ₂ 責
苟	垂		年	行	F	已	五	被	上 ₃ 子
如	九	J	十	志	B	二	男	両	上 ₄
此	齡	C	三	学	H	八	児	鬢	上 ₅
且	但		不	而		懶	総	肌	下 ₁
進	覓		識	不		惰	不	膚	下 ₂
杯	梨	F	六	愛		故	好	不	下 ₃
中	与		与	文	O	無	紙	復	下 ₄
物	栗	G	七	術	D	匹	筆	実	下 ₅

いきなり Francis Bacon のイニシャル FB が現れました。FB を特に意識して枠で囲んでみると、上段の JCH と下段の ODDG については、JCH = Jesus Christ と GOD であることに気づきます。JCH と GOD は、どちらも Γ 型の配置になっています。

天	通	雍	阿	阿	雖	白	上 ₁
運	子	端	宣	舒	有	髮	上 ₂
苟	垂	年	行	F	已	五	上 ₃
如	九	J	十	志	B	二	上 ₄
此	齡	C	三	学	H	八	上 ₅
且	但	不	而	懶	総	肌	下 ₁
進	覓	識	不	惰	不	膚	下 ₂
杯	梨	F	六	愛	故	好	下 ₃
中	与	与	文	O	無	紙	下 ₄
物	栗	G	七	術	D	匹	下 ₅

二つの「I」型の中にあるのは、キリスト、神、そして「三学」「七術」です。漢文の世界で「七術」というと、「韓非子」の「七術」を想起しがちですが、前出の JCH || キリスト と神 || GOD とが関連する語であることを受けて、「三学」と「七術」についても、互いに関係の深いものとして把握すべきでしょう。「術」は英語では art。つまり「七術」 || seven arts。す

「三学」 || trivium

「七術」 || seven arts || seven liberal arts || 七自由科

であることがわかります。三学と七自由科というのは、西洋の教育史などに必ず出てくる中世の基礎科目の呼び名です。詳しくいうと、三学とは、文法・修辞学・論理学 の3科目で、七自由科とは、この3つの三学にさらに他に 四科 || 算術・幾何・天文・音楽 を加えた計7科目のことです。キリスト・神・三学・七自由科 の4つの語が含まれている二つの「I」型は、**宗教と学問を象徴しています。**

二つの「I」型についてももう少し詳しく観察しましょう。「三学」つまり trivium は、「七術」つまり seven liberal arts の一部です。一方、J・C・H (キリスト) は GOD (神) の子ということになっていきます。先の陶淵明親子による「十一」の包含関係を思い出すと、子の5つの「十一」は、その和が「十一」個の数の和五十五になるという意味において、親の「十一」に含ま

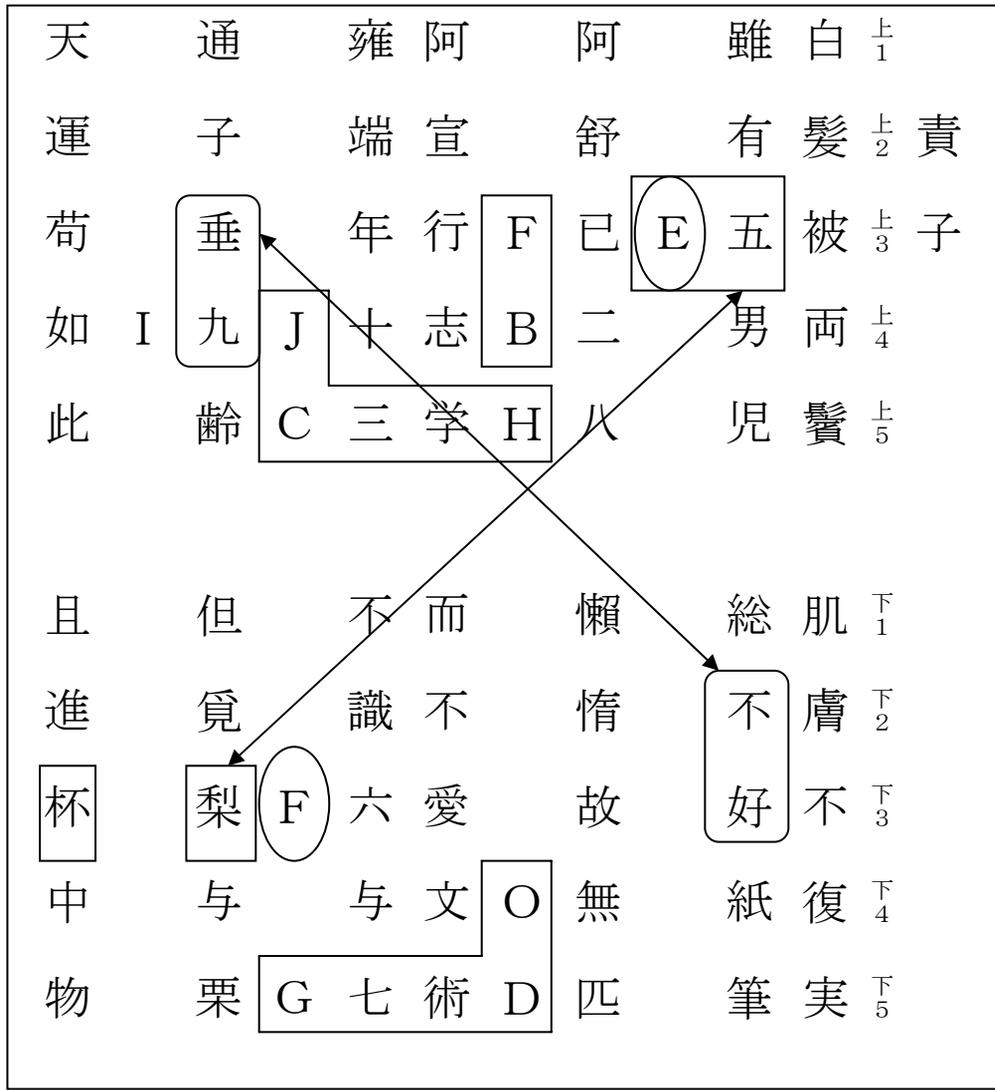
れていると解釈されました。つまり**子が親に含まれていた**、ということですが。この関係をJ・C
 HとGODにも適用すると、J・C・HはGODに『含まれる』と見なすこととなります。すると、
 二つのΓ型のうち、下のΓ型の中に現れている「七術」とGODとが、それぞれ上のΓ型
 の中に現れている「三学」とJ・C・Hとを包含することとなり、**二つの包含関係が符合します**。
 キリストと神という語から、二つのΓ型を合わせるると十字架の形になることに気がきます。
 ではキリストと神が記されているにもかかわらず、十字架が二つのΓ型に割れてしまっている
 のはなぜでしょう。割れた十字架はキリスト教の内部での何らかの分裂を連想させます。ここ
 でΓ型が『薔薇の封印』に登場した時の状況を思い出しましょう。Γ型は *pirate* 、「海賊」と
 してG字型コースの中に出現しました。G字型コースには、ドーバー海峡をはさんで対峙する
 英国とフランスが登場していました。一方の英国は独自の「国教会」で、しかも *Elizabeth I* 世
 の当時はプロテスタント。他方当時のフランスではユグノーの弾圧。Arthur Brooke の溺死も
 そういった当時の情勢に関係がありました。そう考えてみると、我々の二つのΓ型が英国とフ
 ランスの2教会を表していることがわかります。では一体どちらのΓ型がどちらの国の教会な
 のでしょうか。ここで今まで言及されずにいた文字「六」に充てたFに注目しましょう。この
 Fによって下段のΓ型をフランスの教会と見なすならば、上段にも英国を表す文字があるはず
 です。こうして *Elizabeth* 朝当時の英国、つまり *England* を表す文字として第2列の「五」
 E が得られます。

天	通	雍	阿	阿	雖	白	上1	
運	子	端	宣	舒	有	髮	上2	責
苟	垂	年	行	已	五	被	上3	子
如	九	J	十	F	E	兩	上4	
此	齡	C	三	B	男	鬢	上5	
				H	兒			
且	但	不	而	懶	総	肌	下1	
進	覓	識	不	惰	不	膚	下2	
杯	梨	F	六	愛	好	不	下3	
中	与		与	文	紙	復	下4	
物	栗	G	七	術	D	筆	下5	

こうしてテキストに出現した二国を眺めると、大きな空白が海峡を表していることにも気づ

「垂九」 || 「上から下へたれさがる I」 ↓ 「まっすぐな I」 || 「I」
 に気付きます。「垂九」と点対称の位置に配されているのは「不好」。
 「不好」 || 「不女子」 ↓ 「非女子」 || 「女性ではない」

と解すことで、先の「杯」 || 「不木」 ↓ 「非木」 || 「木ではない」と符合します。ではなぜ「垂九」 || 「まっすぐな I」 || 「I」と「女性ではない」とが符合するのでしょうか。「女性ではない」は、『薔薇の封印』の **We gat no M** を思い出させます。つまり I(私 || Francis Bacon) は男性であるので、Elizabeth の王位を私が継承するのが当然なのだ、ということなのです。そしてわざわざ「まっすぐな」と強調しているのは、王位を継承すべきは「曲がった」J(|| James I 世)ではなく、まっすぐなこの I(私 || Francis Bacon) だ、ということなのです。『薔薇の封印』によれば、James I 世の即位後の 1620 年には Francis Bacon はもう王位継承を考えてはいなかった(『薔薇の封印』(数学のいずみ)版改定第3版)の(14-30)の直前箇所を参照)わけですが、ここでの「責子」の作者は「**王位継承を口論する Francis Bacon**」にならび、**おどけた口調**になっているのです。以上で文面に現れた数は全て一通りは解説されたこととなります。



として計算されたことを思いだしましょう。つまり「二八」||「十六」||「一六」です。すると第3列は

「巳二八」||「六十六」||「六一六」

ということになります。『薔薇の封印』では1616年はPyearpつまり16の連続として示されています。全く同様に「雍端年一」||「端の年一をふさげ」によっても

「巳二八」||「六十六」||「六一六」↓「二六一六」||1616年

となります。「巳二八」の箇所は、「阿舒巳二八」つまり「ああ言ってしまった『巳二八』」です。

「阿舒巳二八」の対称位置には「一」を「六」に繋げるこの操作へのヒントとして、

「不識六与」||「不識六与・:」||「六と、それと何だろうか？」

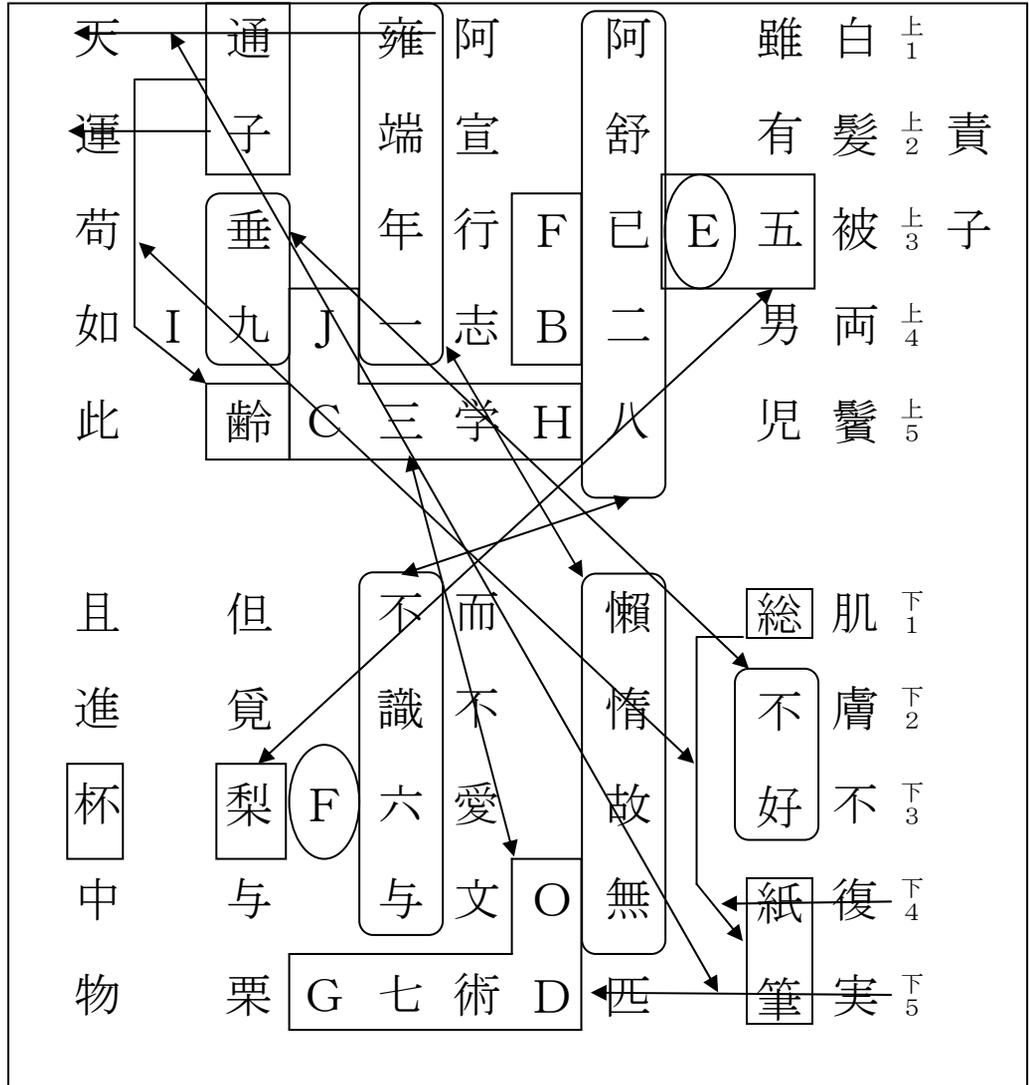
となっています。「不識六与」については、続く「七」はΓ型に取り込まれているため、「六与」までに注目するわけです。

「雍端年一」の対称位置は、「懶惰故無」、つまりShakespeareが1616年に消えたのはFrancis Baconが執筆を「忘れたかったから消滅させたのだ」というのです。「責子」作者はここでも相変わらずのFrancis Baconになりきった、おどけた口調です。

今度はShakespeareとしてではない、本当のFrancis Baconの没年を捜しましょう。先程の「巳二八」を、二×八||十六 というかけ算をせずに、素直に「巳二八」||「六二八」と見なし、さらに「雍端年一」||「端の年一をふさげ」を施すと

「巳二八」||「六二八」↓「二六一八」||1628年

です。この1628年というのは、Francis Baconの没年から2年後です。我々のテキスト中でのFrancis BaconはFB||「巳二」です。「巳二」||「すでに二」。つまり1628年時点では「すでに二」年経っている、というかたちで、Francis Baconの没年である1626年が記されているのです。こうしてShakespeareとFrancis Baconの没年は、同一箇所に記されたこととなり、彼らが同一人物であることが強調されます。そしてその原因となった「通子齡」の対称物は、「総紙筆」、つまりは全著作です。これは、『薔薇の封印』のall idemと符合します。



さらに、「総紙筆」の「紙筆」の字付近をみると、

「実筆匹復紙」

となっております。「実筆」つまり自筆の原稿が、「復紙」つまり「代書屋に清書させて仕上げた紙面」に匹敵する、それほど間違いが無く完璧なものだった、ということ。「復紙」という成句は聞いたことがありませんが、**Shakespeare** の自筆台本が間違いが無い完璧なものだったということは有名ですので、「実筆匹復紙」をこの様に解すことは容易です。さらに「実筆匹復紙」と点対称に位置するのは、

「雍通天子運」＝「天子に至る運をふさぐ」

です。これは**Francis Bacon** が即位しなかったことと符合します。

『薔薇の封印（「数学のいずみ」版改定第3版）』では、**James I** 世の即位後の **Francis Bacon**

となりませんが、肝心の「肌膚不」については、つかえたままです。これはどういうことでしょう。これには『薔薇の封印』で行われた「復実」がヒントになります。『薔薇の封印』の「復実」は、『薔薇の封印（数学のいずみ）版改定第3版』の(8-10)(8-11)(8-12)においてなされたわけですが、そこでの「復実」は、梨の実eを戻すのではなく、へたを付けたままの実aを戻す操作でした。

「責子」の「復実」についても、同様なことを考えましょう。つまり、「梨」だけではなく、実のへたを表すものも復元することになります。そのようなものとして最も妥当なものは、「結ぶ」「つなぐ」「しめくくり」「(髪の)もとゆい」等の字義を有する

「総」

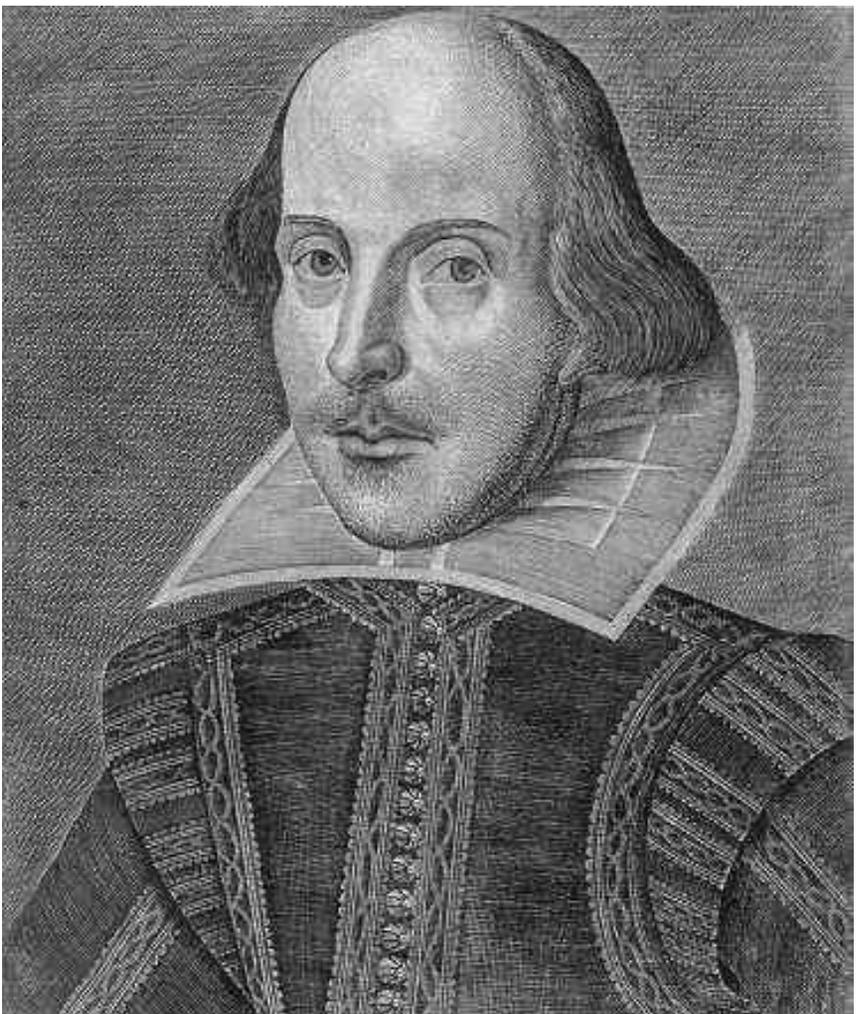
です。こうして「梨」と「総」の2文字を復元することになります。「総」の復元の契機、「肌膚不」のつかえた様、そしてテキストの残骸(前掲)における「総」の配置から、「肌膚不」には例外的に「総」が続くことになります。

上1	責子	白髮被両鬢	雖有男児	阿宣行志	苟如此	且進中物
上2						
上3						
上4						
上5						
下1	肌膚不	白髮被両鬢	雖有男児	阿宣行志	苟如此	且進中物
下2						
下3						
下4						
下5						

白髮被兩鬢
肌膚不総
雖有男児
阿宣行志
而不愛文
但覓梨与栗
苟如此
且進中物

最初の「白髪被両鬢」は良いとして、「肌膚不総」というのはどういうことでしょうか。「白髪被両鬢 肌膚不総」と続けて考えるならば、これはどうみても「白髪が左右の鬢を被っているのだから、全部がむき出しの頭皮ではないのだ」ということです。くだけた言い方をするならば、**白髪被両鬢 肌膚不総**
白髪が両鬢を被っている
完全に禿げているわけじゃない

です。とてもふざけた内容ですが、これは **Shakespeare** の **first folio** の表紙の肖像画に見事に一致します。**first folio** については、以前の解説においても「三通」という形で言及がありました。



雖有男兒
阿宣行志
男の子がいたのに
ああ、志を宣言し、実行した

これはどうみても母親 **Elizabeth Tudor** のことです。「雖有男兒 阿宣行志」というのは、即位して女王の職務に没頭し、子供を顧みなかった、ということでしょう。続く「而不愛文 但覓梨与栗」はどういう意味でしょう。**Elizabeth Tudor** が「文を好まず、ただ梨と栗とを求めた」

わけはありません。前出の通り「栗」↓「慄」と解した上で、「但覓梨与栗」↓「但覓梨之与慄」ととらえましょう。つまり

而不愛文

但覓梨与栗

そして文を好まずに

ただ芝居のスリルを求めた

Elizabeth Tudor がたいそうな教養人であったことは有名です。「文を好まず」というのはどういうことでしょうか。これはつまりは、演劇の鑑賞はしたが台本は読まなかった、ということでしょう。直接に台本を読んでいれば *Eru Brute?* の真意が伝わったはずだ、ということでしょうか。しかし Elizabeth は 1603 年には亡くなっており、また Shakespeare の戯曲 Julius Caesar は今のところは First Folio (1620 年以降) が初めての出版とされています。責子作者はこのあたりの事情を知らなかったのでしょうか。

苟如此

且進中物

とりあえずこんなところであるのなら

中の物を進めるとするか

「中の物」というのは、二つの T 型の中のもの、つまりは学問と宗教です。「中の物を進める」というのは、Francis Bacon が学問と宗教に関する大きな仕事を成し遂げたことを、Francis Bacon になりきった、おどけた口調で語っているわけです。

白髪被両鬢

肌膚不総

雖有男兒

阿宣行志

而不愛文

但覓梨与栗

苟如此

且進中物

白髪が両鬢を被っている

完全に禿げているわけじゃない

男の子がいたのに

ああ、志を宣言し、実行した

そして文を好まずに

ただ芝居のスリルを求めた

とりあえずこんなところであるのなら

中の物を進めるとするか

これでは「子を責める」のではなく「子が（親を）責める」ようなものです。Francis Bacon になりすました「責子」の作者は「責子」という題名にまで、パロディーを施してしまってい

ます。ここまで無礼講が過ぎると「阿舒」が最後に続かないことが疑問に思えてきます。現時点のアルファベットによる解説にあつては、「阿舒」は「阿舒巳二八」として配されていました。なぜ極端な無礼講ではなく「巳二八」の前に「阿舒」を配したのででしょうか。それはこれほどの無礼講よりもさらになお、「阿舒」としなければならぬ重要な事項が「巳二八」に記されているからだ、と考えるべきでしょう。前出の Francis Bacon の没年を読み取った箇所を再掲します。

「巳二八」||「六二八」↓「一六二八」||1628年

です。この1628年というのは Francis Bacon の没年から2年後です。我々のテキスト中での Francis Bacon はFB||「巳二」です。「巳二」||「すでに2」。つまり1628年時点では「すでに2」年経っている、というかたちで、Francis Bacon の没年である1626年が記されているのです。

このことと「巳二八」の重要性を重ね合わせると、つまりは「責子」が1628年に作られたというところが「阿舒」であったのに違いないと、ようやく気付くのです。

では解説結果を状況証拠として、責子の作者を割り出してみましよう。まず次の7つの事項について考えます。

- ① 1628年（明朝末期）に存命中の人
- ② 漢語の扱いに長けている、つまり中国人
- ③ 『薔薇の封印』の Bacon=Shakespeare の情報を得られる立場
↓ 西洋との関係が深いだけではなく、実際に親密に西洋の教養人と接した人
- ④ 「五筆如算學端」という表現↓科学に関する知識を有する人
- ⑤ 暗号作成の巧みさと柔軟さ
↓ 並外れた集中力・論理性・思考の柔軟さを有する人
- ⑥ 割れた十字架（二つのΓ型）
↓ 英仏キリスト教会の対立に関する知識
↓ キリスト教に関するとても詳しい知識を持つ人
↓ 単なる信者として以上に外国人宣教師と深い関わりを持つ人
- ⑦ 陶淵明の詩集に贋作を混ぜ込むことができる立場
↓ かなりの地位と人脈を持つ人

④⑤から、作者は科学者である可能性が高い。責子の暗号解説の導入箇所は、位取り表記とゼロの使用に関するものでした。これら2つは筆算の発達と密接に関係しています。『錢宝琮著 川原秀城訳 中国数学史 1990 みすず書房』によれば、

マテオ・リッチチ利瑪竇はドイツの数学者クラビウスの弟子で、クラビウスが撰じた数学講義をいくつか中国にもたらした。徐光啓とともに《幾何原本》前六巻を漢訳し、李之藻とともに《同文算指》を漢訳している——これが中国数学発展史上、西洋数学が中国へ伝来した最初である。（中国数学史 p.239.）

さらに同書では

《同文算指》はおもに、クラビウス《実用算術概論》(Epitome arithmeticae practicae)[1585年]と程大位《算法統宗》[1592年]にもとづいて編訳されたものである。ヨーロッパの算術を始めて紹介し、後の算術に巨大な影響を与えている。

とされます。

一方『桑原隲藏著 大秦景教流行中國碑に就いて 青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp/> 図書カードNo. 4707』(底本は「桑原隲藏全集 第一巻」岩波書店 1938 (昭和 43) 年 2 月 13 日初版発行。)には次のような記述があります。

〔前略〕

所が明末になつて、西暦十七世紀の初半に、偶然の出来事で、この景教碑が土中から發掘されて、世間に現はれて來た。この古碑出土の状況を、尤も早く尤も詳しく世間に通告した、セメド (Semedo) と云ふ宣教師の作つた『支那通史』には、大要左の如く記載してある

〔中略〕

千六百二十五年 (明の天啓五年) に、陝西省の首府の西安府の附近で、支那職工達が建物を新築する爲に、礎石を置く目的で、地面を掘り下げた。所が彼等は (偶然) 一石碑を掘り當てた。

〔中略〕

この注意すべき古碑が出土すると、職工達は直にその由を官衙に上申した。知府が現場に出馬して、古碑を檢閲した後ち、之を見事な土臺の上に安置し、風雨の迫害を保護し、同時に諸人の觀覽を自由にすべく、碑の上に碑亭を構へた。珍奇な古碑の出土の評判が四方に擴まると、その古碑を見物すべく、澤山の人々が雲集した。丁度この頃は、キリスト教が可なり支那人の間に知られて居つたから、キリスト教に關する若干の知識を有する (さる紳士は、この古碑を見て、キリスト教に關係あるものと推測して、(浙江省の) 杭州府に在住する彼の友人で、教名を Leo {n} といふ、キリスト教信者の官吏の手許へ、その碑拓一枚を送り届けた。この碑拓は、當時杭州府在住の宣教師達に、想像以上の大なる歡喜を齎らした。

〔中略〕

尚ほ又明の李之藻の「讀景教碑書後」といふ一篇がある。こは『唐景教碑頌正註』の中にも、『方外焚書』などの中にも載せられて居る。この李之藻は、かの有名なる徐光啓と相並んで、當時の耶穌信徒中の大立者であつた。彼の教名を Leon といひ、當時の洋人の記録には、Leon Li として知られて居る。上に紹介したセメドの記事に、杭州府在住の官吏で教名 Leo {n} とあるのは、即ちこの李之藻である。〔後略〕

文中注目すべきは、「この李之藻は、かの有名なる徐光啓と相並んで、當時の耶穌信徒中の大立者であつた。」という箇所です。徐光啓と李之藻。どちらも数学者であり、同時に敬虔なクリスチャンでもあつたのです。再び『錢宝琮著 川原秀城訳 中国数学史 1990 みすず書房』によれば、

李之藻(りしそう) [1565—1630 年] は、あざなを振之(しんし)といい、仁和の人、万曆二十六年 [1598 年] に進士に及第し、南京工部員外郎となる。かれは早くから利瑪竇マテ

オ・リッチにしたがつて西洋の暦算を学び、積極的に西法を主張する。1613年には万曆帝に西洋天文学説十四事を奉り、いそぎ館局を開設して、西法を翻訳することを請う。かれは天文暦算の著作を翻訳した以外にも、著名な哲学著作——《名理探》を翻訳している。1629年、詔によつて徐光啓とともに暦法を修訂し、翌1630年に長逝する。〔以下略〕（中国数学史 p.246.）

徐光啓 [1562—1633年]、あざなは子先、上海の人。万曆二十五年 [1597年]の挙人、三十二年 [1604年]の進士。天啓二年 [1623年]に礼部右侍郎に任命され、崇禎年間に、前後して礼部尚書、翰林院学士、東閣学士となり、文淵閣大学士にいたつた。[1632年]。徐光啓は商人の出身で、かれの政治的立場は振興商人階級の利益を代表する。国家の防衛、農業の発展、水利の修興や暦法の改定などにかんがりの貢献をなし、西洋暦算の紹介にも全力を尽くした。かれは利瑪竇マテオ・リッチとともに《測量法義》を翻訳し [1607—1608年]、ついで《測量異同》と《句股義》を書いてゐる。〔以下略〕（中国数学史 p.247.）

ところでマテオ・リッチが中国に入国したのは、有名な「グレゴリオ暦」が1582年にグレゴリオ13世によつて制定されてから間もない頃です。この「グレゴリオ暦」というのは、今日の暦とほぼ同じものです。『平川童弘著 マテオ・リッチ伝2 1997年 平凡社』pp.24-25によれば

北京に安住することを得たリッチは、そのグレゴリオ暦の漢訳をこしらえて、そこに示された西洋天文学知識の優位を基に、中国士人の反応を確かめようとした。一六〇五年五月九日付で北京からローマのイエズス会士ファビーオ・デ・ファビーに宛てた手紙にはその間の機敏が次のように示されている。

私は中国の年にあわせて『グレゴリオ暦』をも中国の文字に移し変えました。そうすればそれを見ればキリスト教徒も一年の固定祝祭日や移動祝祭日がみなすべてわかるばかりか、中国の月や時が中国の暦以上にはっきりと正確にわかるからです。中国では毎年大變な費用を出して新しく暦を作るのです。『グレゴリオ暦』の漢訳を見て中国人は士大夫にいたるまで感嘆しました。（以下略）

科学者・数学者・翻訳家であり敬虔なクリスチャンでもあつた徐光啓と李之藻。じつは彼ら2人はある意味において、明朝末期に特有の典型的な人物だったので。次に掲げるのは広東大学の Prof. Weihe Zhong による

『An Overview of Translation in China : Practice and Theory
<http://www.accurapid.com/journal/24china.htm>』

の「2.3 Technical Translation during the Yuan and Ming Dynasties」からの引用と拙訳です。

The situation was to change toward the end of the 16th century. With the arrival of western Christian missionaries, Jesuits in particular, China came into contact with Europe which had begun to overtake China in various scientific and technological fields. To facilitate their relations with Chinese officials and intellectuals, the missionaries translated works of western science and technology as well as Christian texts. Between 1582 and 1773 (Early Qing dynasty), more than seventy missionaries

undertook this kind of work. They were of various nationalities: Italian (Fathers: Matteo Ricci, Longobardi; De Urbsis, Aleri and Rho); Portuguese (Francis Furtado); Swiss (Jean Terrenz, Polish (Jean Nicolas Smogolenshi), and French (Ferdinand Verbiest, Nicolas Trigaut).

The missionaries were often assisted by Chinese collaborators, such as Xu Guangqi, a distinguished scientist and prime minister during the last years of the Ming dynasty, a period of scholarship and intellectual activity, Li Zhizao, a scientist and government official, Wang Zheng, an engineer and government official, and Zue Fengzuo, a scientist. Matteo Ricci was assisted by Xu Guangqi when he translated Euclid's Elements in 1607 and by Li Zhizao when he translated Astrolabium by the German Jesuit and mathematician Christophorus Clavius (1537-1612). For these Chinese scholars, translation was not limited to passive reproduction; instead, the translated texts served as a basis for further research. Li Zhizao, for example, uses his preface to Astrolabium, the first work to set out the foundations of western astronomy in Chinese, to make the point that the earth is round and in motion.

【中略】

Although translations carried out during the Ming dynasty were mainly on science and technology: mathematics, astronomy, medicine, hydrology etc., there were also some translations of philosophy and literature in this period. Li Zhizao, with assistance of the foreign missionaries, translated some of Aristotle's works like *On Truth* into Chinese. In 1625, the first translation of Aesop's Fables was also introduced to Chinese readers.

十六世紀の終わり頃、事態は変わることになった。西洋のキリスト教宣教師、特にイエズス会宣教師の到着によって、中国は諸科学と技術の領域で中国を追い越し始めたヨーロッパと接触するようになった。宣教師たちは中国の官僚や知識人との交流を深めるために、西洋の科学・技術工学の研究を、キリスト教のテキストと同様に翻訳した。1582年から1773年(金朝初期)の間に七十人以上の宣教師がそのような翻訳を請け負っている。彼らの出身国は様々で、イタリヤ人(神父 Matteo Ricci, Longobardi, De Urbsis, Aleri and Rho)、ポルトガル人(Francis Furtado)、スイス人(Jean Terrenz)、ポーランド人(Jean Nicolas Smogolenshi)、フランス人(Ferdinand Verbiest, Nicolas Trigaut)などである。宣教師たちによる翻訳は多くの場合、中国人の同僚の補佐を得たものであった。たとえば徐光啓。彼は著名な科学者であり、学術の隆盛期となった明朝末の数年間、総理大臣を勤めた人物である。その他、科学者で政府官僚の李之藻、技術者で政府官僚の「Wang Zheng」、科学者の「Zue Fengzuo」などの補佐によったのだ。マテオ・リッチは、1607年にユークリッドの原論を翻訳する際には徐光啓の助けを得、ドイツのイエズス会会員で数学者のクリストフォラス・クラビウス(1537-1612)の「Astrolabium」を翻訳する際は、李之藻の補佐を得た。これら中国人の学者にとって翻訳の作業は、受身な姿勢での単なる再生産ではなく、さらなる研究のための基礎となるものだった。李之藻を例にとるならば、西洋天文学の基礎を中国語で記した最初の書である「Astrolabium」の序文において、彼は地球が球体であり動いていると述べているのだ。

【中略】

明代に翻訳されたものは、数学、天文学、薬学、水文学その他の科学と技術工学に関するものが主であったが、哲学書や文学作品もいくつかはある。李之藻は、外国人宣教師の補助を得て『真理について』等のプリストテレスの著作を中国語に翻訳している。また1625年にはインソップの寓話が中国の読者に紹介されてもいる。

では徐光啓と李之藻のキリスト教徒としての活躍はどのようなものだったのでしょうか。次に掲げるのは

『CHINESE CULTURE HOMEPAGE <http://www.yutopian.com/> 』

とつうH.P.における RELIGION \ Christianity のページの Early Chinese Christian の李之藻 Li Zhizao と徐光啓 Xu Guangqi の項目の引用と拙訳です。

Li Zhizao (1569-1630)

Born in Hangzhou, Li was a Catholic and a scientist during the Ming Dynasty. In 1598, Li became an official. He studied under Matteo Ricci and adopted western knowledge and the Catholic doctrine. In 1610, Li was baptized. On his way to his father's funeral, Li invited Lazaro Cattaneo and Nicolas Trigault to preach in Hangzhou. In 1613, Li assumed a position as an official in Nanking and worked with Xu Guangqi. Both men edited and translated numerous Christian literatures into Chinese. Li also helped to translate Matteo Ricci's books into Chinese.

李之藻(1569-1630)

杭州生まれの李は明代のカトリックの科学者。1598年に官僚になった。マテオ・リッチの下で研究を行い西洋の知識とカトリックの教義を身に付けた。1610年に洗礼を受けた。父親の葬儀に向かう途上、杭州での布教活動のためにLazaro CattaneoとNicolas Trigaultを訪ねている。1613年には南京の官僚の地位を任せられ徐光啓と共に勤務した。両氏ともに夥しい数のキリスト教の文献を出版・翻訳した。李はさらにマテオ・リッチの翻訳の手助けもしている。

Xu Guangqi (1562-1633)

Xu Guangqi was one of the earliest Catholics towards the end of Ming Dynasty. He was also a scientist, and a translator. Born in Shanghai, Xu passed the national examination and became a Scholar. On his way to Beijing, Xu met Matteo Ricci. In 1603, he was baptized by Jean de Rocha, and became a Christian with the Christian name Paul. Xu became a high ranking official in 1604 and studied under Ricci. On his way back to Shanghai to attend his father's funeral, Xu dropped by Nanking and urged Lazaro Cattaneo to preach in his hometown. They held church meetings in Xu's house and baptized his family members and friends. Xu set up astronomy instruments in Beijing in 1610 and established Catholic schools in 1616. In 1625, Xu resigned from his position, returned to Shanghai and wrote the 'Book of Agriculture.' Xu regained his position in 1628 and wrote the 'Book of Annals of Zong Zhen' with Li Zhizao. He also translated many books written by Ricci.

徐光啓 (1562-1633)

徐光啓は明代末期のカトリックとしては最初期の人。科学者・翻訳家でもあった。徐は上海生まれで科擧に合格して学者になった。北京に向かう途上、マテオ・リッチに出会う。

1603年にJean de Rochaに洗礼を受け、洗礼名をPaulといった。1604年には最高位の官僚となり、リッチの下で研究活動を行う。父親の葬儀に参列するために上海に向かう途上、南京のLazaro Cattaneoを訪ね故郷での布教を促した。彼らは徐の家で集会を行い、徐の家族と友人に洗礼を施した。1610年には北京に天文機器を設置し1616年にはカトリックの学校を設立。1625年には引退し、上海に戻って農業に関する本を執筆。1628年には以前の地位に復帰し李之藻と共にBook of Annals of Zong Zhenを執筆。徐はリッチの著した多くの本の翻訳も行っている。

※原文中 Xu resigned from his position とあるのは Xu resigned from his position の誤りでしょう。

2人とも「敬虔な」という表現が陳腐に思えるほどの目を見張る活躍ぶりです。ここでまた前出の『中国数学史』p.248 から引用します。

1629年五月一日の日食に際して、徐光啓の西法による推算は比較的天象に合致した。同年七月、礼部は宣武門内の「首善書院」に暦局を開設することを決定し、徐光啓に暦法の修訂を命じた。徐光啓は職務をひきつくと、ただちに李之藻を起用し、またロンゴバルディ龍華民 [Nicolaus Longobardi, 1559-1654年、イタリア人、1597年に来華]とテレンツ鄧玉函 [Jean Terrenz, 1576-1630年、スイス人、1621年に来華]を推薦して、暦法の編纂を開始した。

このロンゴバルディもテレンツも前掲の Weihe Zhong 教授の論文に出てくる宣教師です。つまりこの「暦局」は、宣教師と敬虔なキリスト教徒で固められた宗教上においても大変結束した集団だったのです。ここで、徐光啓と李之藻について、先に提示していた7つの「状況証拠」を考えてみると、2人とも

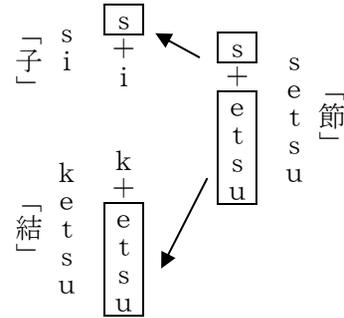
- ① 1628年(明朝末期)に存命中
- ② 中国人
- ③ 西洋との関係が深いだけではなく、実際に親密に西洋の教養人と接した人
- ④ 科学に関する知識を有する人
- ⑤ 並外れた集中力・論理性・思考の柔軟さを有する人
- ⑥ 単なる信者として以上に外国人宣教師と深い関わりを持つ人
- ⑦ かなりの地位と人脈を持つ人

というすべての事項に該当することがわかります。「讀景教碑書後」という詩篇の件や、ヨーロッパの筆算を始めて紹介した《同文算指》の翻訳から、李之藻を責子作者としての第一容疑者と見てよいでしょう。

「責子」の作者が、自分こそが作者であるということを読者に知らせるためには、どうしたらよいでしょう。第一に考えられることは、作品と自分の名前との関連を、何らかの方法で記しておくことです。

ところで中国では、漢字の発音を表すために反切という方法が使われます。大変大雑把な説

明になりますが、例えば「節」|| set su という文字は、「子結切」です。つまり「節」|| set su || s + e t s u であり、「子」|| s i || s + i であり、「結」|| k e t s u || k + e t s u ですので、



となるわけです。漢字の発音を上下二つの音（上を声母、下を韻母と呼びます）の連続体としてとらえ、与えられた1つの漢字の音を、同じ声母をもつ漢字と同じ韻母をもつ漢字を上下に並べた形で表すのです。この並べた2文字に「反」もしくは「切」という語を続けて、「節」は「子結切」などとするのです。（ただし今挙げた3つの漢字の発音は、あくまで説明を簡単にするための便宜上のもので、実際の音はもっと複雑なものです。「節」が「子結切」などというのは、まるで「節」の一文字が切られて「子」「結」の2字になったような印象を与えますね。この様に各漢字に反切を付記して、似た音、同じ音の漢字ごとにまとめた漢字の発音辞典は「韻書」と呼ばれ、それらの中で代表的なものは「切韻」「廣韻」「集韻」の3つです。中国では過去にこのような反切が、単に字引の字音を表すことに限らず、様々な使われ方をされたということが『頼惟勤著水谷誠編 中国古典を読むために 1996 大修館書店』pp.180-183「姓名判断としての反切」に記されています。じつは「責子」と「李之藻」という二つの名には、大変巧妙な形で、「集韻」の「反切」を用いた暗号が秘められているのです。

以下『封印を継承する者たち』(1)(2)を通して、提示する半切はすべて『諸橋轍次著 大漢和辞典 1971 大修館書店』に付記された『集韻』の反切によります。また、たとえば「9-279」というハイフン付き数字はこの『大漢和辞典』の第九巻の279ページからの引用であることを示すこととします。

李之藻のあざなは振之。まず之藻と振之がどちらも「之」を含むことに着目します。

振之

之藻

「振」は之刃切、之人切、止忍切。このうち、「之」を含む2つの反切に注目。これらを並べてみましょう。

之 刃
之 人

「之」を除けば、「刃人」||「人を刀で斬り殺す」という物騒な句になります。この「刃人」を、やはり同じく「之」が上に位置する人名「之藻」に適用します。つまり

之 刃
之 人
之 藻

ですので、人名の一字である「藻」を「斬り殺す」、つまり「藻」の反切を採るわけです。この「刃人」の手法は、『薔薇の封印』の *Shake Bacon* に対応しています。「藻」は、子皓切と側絞切です。

側絞
子皓

「側絞」は「へり」が「くびれる」ことです。「責子」の「子」が「子皓」に含まれていることを意識して、「責子」の「責」の反切を採ると、側革切、側賣切、緇洗切。このうち、先の側絞と同様に「側」で始まる**側革切と側賣切に注目します**。(緇洗切については後述します)。「側革」の「革」には、「あらためる、たるんだものをぴんと張ってたてなおす」という語義があります。「革」のこの語義を、先の「側絞」の「絞」への指示と解し

側 革 ← 側 絞 ← 糸 交 ← 交 糸 ← 交 糸
交 糸 || 交 わる 糸

が得られます。「交わる糸」とは何か。「子皓」も含めて「革」の操作を行うと、

ウ Fが余分である

という3つの問題が残ります。これらの解決には、我々がまだ手をつけずにいる「責」の反切「側賣」を用いるはずですが、以前「側賣」の「革」を用いたのと同様に「側賣」の「賣」に着目しましょう。しかし「賣」の反切を探ると、莫懈切と莫駕切です。「莫懈」は「氣をゆるめて怠けるなかれ」、「莫駕」は「使うなかれ」です。これらによって、「賣」以外の何か別の文字の反切を考えることとなります。ふと気が付くと『大漢和辭典』の「賣」のすぐ前には「賣」とよく似た字が載っているのです。「賣」は「士四貝」に対して、「賣」は「士四貝」という字です。「士四貝」は「売る」に対して、「士四貝」は「売り歩く」です。この「士四貝」の反切が余六切なのです。「余六」は「余りの六」というのはウと符合します。この「余六」に至る符合は独特です。まず「責」は「側賣切」は「賣の反切」は「莫懈切と莫駕切」によって、「賣」を否定して、「賣」から「賣」へと視点を移させて、「賣」は「余六切」へと導いているのです。

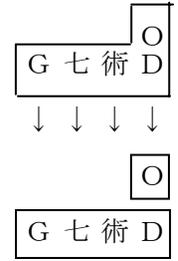
「賣」が「賣」のすぐ前に載っている」ということは、「側賣」は「かたわらの『賣』」と符合します。つまり「責」は「側賣切」によって得る「賣」が修正を必要とするものだ、と暗号自体が自分で主張しているのです。「士四貝」が修正を必要とし正しくは「士四貝」だということとです。つまり「士四貝」に「四が無いこと」に修正が必要だった。この「四が無いこと」は、以前に登場した「無匹」は「無四」は「無四」の「無四」と符合します。ここで改めてテキストを眺めると、「無四」のみならず「OD」もまた修正が必要な事項であることに気がきます。

天	通	雍	阿	阿	雖	白	上 ₁
運	子	端	宣	舒	有	髮	上 ₂ 責
苟	垂	年	行	F 已	E 五	被	上 ₃ 子
如	I 九	J 一	志	B 二	男	兩	上 ₄
此	齡	C 三	学	H 八	兒	鬢	上 ₅
且	但	不	而	懶	総	肌	下 ₁
進	覓	識	不	惰	不	膚	下 ₂
杯	梨	F 六	愛	故	好	不	下 ₃
中	与	与	文	O 無	紙	復	下 ₄
物	栗	G 七	術	D 匹	筆	実	下 ₅

以前得ていた2つのL字型において、上段のL字型では、JCHの3文字を、L字に沿って順に得るのに対し、下段のL字型では、L字に沿って順にGODを得ることが不可能なのです。そして修正が必要なのは、まさに「OD」の箇所です。「無四」の状態であるところの「賣」の修正は、「賣」の反切を採ること、つまり「賣」を（声母と韻母という）2つに分けることから始まりました。このことを手掛かりに「OD」についても、それを2つに分けてみましょう。つまり

OとDを分離して、

とします。すると



天	通	雍	阿	阿	雖	白	上 ₁
運	子	端	宣	舒	有	髮	上 ₂
苟	垂	年	行	已	五	被	上 ₃
如	九	一	志	二	男	両	上 ₄
此	齡	三	学	八	児	鬢	上 ₅
且	但	不	而	懶	総	肌	下 ₁
進	覓	識	不	惰	不	膚	下 ₂
杯	梨	六	愛	故	好	不	下 ₃
中	与	与	文	無	紙	復	下 ₄
物	栗	七	術	匹	筆	実	下 ₅

Francis Bacon のイニシャル FB と余りの「六」＝F 以外を繋げると過不足無く、「Leo Li」つまり李之藻の洗札名「Leo Li」となることに気がきます。

H 学三 C J I
↑ L の大文字

G 七術 D E O
↑ L の小文字

先の3つの問題は、

- ア L E のつなげ方が作為的である
- イ O が得られていない
- ウ F が余分である

でした。ウは「賣」の反切「余六」によって、イはOとDの分離によって、アは過不足無く「Leo Li」を得たことによって解決されました。
3つの問題が解決した今、「無四」のさらに続きを考えてみましょう。今度は「無四」の対応物「四」、つまり「士四貝」の「四」について考えましょう。「四」は「目」と同字であり「目」は「莫六切」です。「六」は殺戮の「戮」に通じ、殺すという意味を有します。つまり

「莫六」 || 「殺すなかれ」

です。これは我々が李之藻（の名）に対して「刃人」を行ったことに対する非難です。「Leo Li」の名で姿を現した李之藻が我々に抗議している、という設定なのです。このコミカルな非難で符合は一段落するわけですが、「賣」という字には、以前にも出会っていることにお気付きの方もいるでしょう。マテオ・リッチの漢名「利瑪竇」の

竇

つまり「竇」 || 「穴」 + 「士四貝」だったので。
「利瑪竇」の反切を採ることを考えましょう。ただし先の「竇」 || 「穴」 + 「士四貝」を意識して、「利瑪竇」ではなく「利瑪『士四貝』」と「穴」の反切を採ることにしましょう。すると「利」は力至切、「瑪」は母下切、「穴」は胡決切と戸橋切です。

利瑪「士四貝」

←

力至母下余六

←

力が母に到り、余りの六を下す

←

圧力が母にかかる。余りのFを下放する。

です。これは『薔薇の封印』の Rose cast f と完全に符合します。圧力に屈した母親が Francis を王室から下放したということ。「穴」の反切である「胡決」を合わせて考える（「胡」はエビス（つまり中国人にとつての異民族）のことです）と「王室が『下余六』を決定した」ということです。

以上の解説から、「責子」が李之藻の作であることは間違いない。「責子」という天才的贋作をどのようにして陶淵明の詩集の中に忍び込ませたのかについては、私はまだ明確な答を得られていません。しかし李之藻や徐光啓の華々しい執筆・出版活動を考えるならば、彼らが出版業者とも何らかの形で共謀することが可能だったのではないかと、という疑いはあながち外れたものではないでしょう。

『錢宝琮著 川原秀城訳 中国数学史 1990 みすず書房』において 1565 年とされる李之藻の生年は、『CHINESE CULTURE HOMEPAGE <http://www.yutopian.com/>』においては 1569 年とされています。錢宝琮氏の説に従うならば李之藻は Francis Bacon と同じ六十五歳天運であったこととなります。

マテオ・リツチの漢名が暗号の中に用いられていたことのみをもって、Bacon = Shakespeare の暗号のすべてを李之藻に教えたのがマテオ・リツチなのだ、と即断するのは誤りです。リツチは 1610 年に亡くなっています。Francis Bacon の死亡年 1626 年 First Folio に関する「三通」という言及、そして First Folio の肖像画を揶揄した「肌膚不総」は 1620 年以降の事についてのものですので、少なくともこれら 3 点については、マテオ・リツチは知らなかったはずで、す。また「肌膚不総」は、李之藻が Shakespeare の Folio の現物を実際に眺めたことがあったであろうと推測させます。

「責子」のテキスト上を盛んに交差した「交糸」。この激しい交差は英仏の宗教上の対立とも、結びつきとも解釈できます。しかし上段はイギリスを、下段はフランスを示していたテキストにおいて、Francis Bacon を意味する FB がイギリスである上段に配されていた一方で、Li Leo のイニシャル LL は、上下に別れて記してありました。上段と下段を裂くことは、Li Leo の名を裂くことでもあるのです。李之藻は敬虔なカトリックであるという以前に、敬虔なキリスト教徒であったのではないのでしょうか。では Bacon = Shakespeare の暗号を李之藻に教えたのは誰だったのか？これは魅惑的な問題です。

ところで前述した通り「穴」は胡決切と戸橋切です。このうち「胡決」については既に述べましたが、もう一方の「戸橋」にはどんな意味が隠れているのでしょうか。さらに「戸」と「橋」の反切を採ると「戸」は後五切で、「橋」は訣律切です。「訣」は「わかれる」こと。

戸 後五

橋 訣律

というように並べて、二組の反切を横に追うと、「後訣五律」＝「後に五律と分かれる」、です。

「五律」は成句で五言律詩のこと。「責子」は五律ではありません。確かに五言詩ではありませんが五律のような八句ではなく十四句であるし、平仄にしても冒頭の「白髮被兩鬢」というのは「仄仄仄仄仄」といったいかにもおどけた風で、中国の人たちが五律を朗読する時のあの凜としたメロディーにはなり得ません。要するに「五律」のような格調高い「律」が無い。しかし「後訣」と言う以上は「後訣五律」の「五律」は「責子」を指しているはずで、このような誤りは、天才的暗号詩人である李之藻にふさわしくはありません。実は「律」は劣戌切です。十二支を考えれば「劣戌」||「劣十一」||「劣つた十一」、つまり「確かに「責子」は「五律」ではないが、「五律」の律(規則)の代わりに、それよりも劣つた「十一」の「律」がある、ということ。これは反切を探る操作を6度重ねて使用する神技です。「劣十一」に至る流れは次の通りです。なお、↓印の右隣の「切」はその操作で反切が採られていることを示しています。

「責」↓「側賣切」↓「賣」↓「莫懈切、莫駕切」↓「賣」ではダメ) ↓

↓「士四貝」↓「余六切」↓「賣」↓「士四貝」 ↓

↓「賣」↓「穴」+「士四貝」 ↓

↓「穴」↓「戸」と「橋」↓「後訣五律」↓「律」↓「劣戌」↓「劣十一」

結局

「後訣五律」↓「後訣責子」||「後に責子と分かれる」

です。李之藻は反切を通常の漢語と同様に、いやそれ以上の巧みさをもって、使いこなしているのです。

李之藻という名前とマテオ・リッチの漢名「利瑪竇」にこれだけ見事な反切の暗号が含まれていたことは、他の人たちの名前の反切も調べることに導きます。徐光啓と宣教師たちの何人かについて試してみましよう。

徐光啓

「徐」は詳余切、「光」は姑黄切と古曠切、「啓」は遣禮切。

徐光啓

詳余古曠遣禮

姑黄

曠古は成句で「いにしへをむなしくす。昔から例が無い。」です。
遣禮Ⅱ贈り物を送る

つまり

古曠遣禮Ⅱいにしへに遣禮むなくす

Ⅱ昔、遣禮は無かった。

Ⅱその昔、贈り物を贈ったことは無いぞ。

ちなみに、曠は苦謗切。

謗Ⅱ「あばいて言い広める」です。つまり「苦謗」Ⅱ『謗』に苦しむ。」です。

詳余古曠遣禮

余計なことを詳しく言うが、その昔、贈り物など贈ったことは無いぞ。

(あばいて言い広められるのを苦しむ)

これだけでは何のことかわかりません。

ロンゴバルディ龍華民

[Nicolaus Longobardi, 1559-1654 年、イタリア人、1597 年に来華]

「龍」は力鐘切と莫江切と魯勇切、「華」は胡瓜切と胡化切と空媧切、「民」は彌憐切。

龍華民

力鐘胡瓜彌憐

莫江胡化

魯勇空媧

これは筆者には解説不能でした。

テレンツ鄧玉函

[Jean Terrenz, 1576-1630 年、スイス人、1621 年に来華]

「鄧」は唐互切、「玉」は虞欲切、「函」は胡南切と胡讒切。

鄧玉函

唐互虞欲胡讒

胡南

讒Ⅱそしる

虞Ⅱ舜が帝位に就いていた時代

互Ⅱこちらからむこうまでわたる

端から端までとどく

← 唐互虞欲胡護

↑↑↑↑↑↑↑↑

← 唐互虞欲胡護

← 護胡欲虞互唐

← 胡をそしり、虞を欲し唐をわたる。

← 胡をそしり、理想の時代を望んで、唐のすみずみまで行った。

「胡をそしり、虞を欲し唐をわたる」については、この句が宣教師の名前から得られたのですから、この句をキリスト教と結びつけて解釈してみましよう。「胡」9-279では「えびすの名。秦漢以前は専ら匈奴の称であったが、後、塞外民族の汎称となる。」としています。一方、塞外民族については、「夷」3-556③では「四夷者、東夷・西戎・南蛮・北狄之総號也。」としていいます。「函」のもう一方の反切「胡南」により、「胡をそしり、虞を欲し唐をわたる」の「胡」は「南胡」つまり「南蛮」。すると「胡をそしり、虞を欲し」というのは、「キリスト教がヨーロッパに受け入れられずに、理想の地を求めた」ということでしょうか。「唐のすみずみまで行った」というのは、「唐代の中国の隅々まで布教活動を行った」ということでしょうか。西洋で受け入れられずに唐で広まったキリスト教といえば景教（ネストリウス派キリスト教）が有名です。つまり

← 護胡欲虞互唐

← 胡をそしり、虞を欲し唐をわたる。

← (ネストリウス派を受け入れなかった) 西洋の国をそしり、理想の時代を望んで、唐のすみずみまで行った。

となります。景教といえば、前出の通り、大秦景教流行中国碑が李之藻の当時に発掘されています。先に引用した『大秦景教流行中国碑に就いて』には「この碑拓は、當時杭州府在住の宣教師達に、想像以上の大なる歡喜を齎らした。」とありました。これは当時の中国での布教が困難を伴うものであったことを想像させます。既に紹介している『マテオ・リッチ伝』の pp.37-38 に、当時の中国人の外国に対する姿勢について、次の様な興味深い記述があります。

十六世紀を通してカトリック教会はその勢力を中南米、アフリカ、インド、東南アジア、東アジアの日本、中国などへ伸ばしてきた。布教とか宣教といえば聞こえはいいが、それが制服と並行して行なわれた土地（中南米、フィリピン）もあった。中には日本のように住民が進んで舶来の文物に興味を示し、領主がその子弟をローマに送ることに協力した土地もあった。人々が無関心の土地も、もちろん多かった。明朝シナの場合は、朝廷の高官は自分たちは上に位するものとして下に位する秦西の儒士利瑪竇の北京在住を許し、その生活費の面倒も見た。西洋側ではキリスト教布教のつもりでいたが、シナ側から見れば、

利瑪竇ことリッチも、それより少し前に中国に渡来した日本の五山の僧侶も、中国文明を学びに来た者としては同じカテゴリーに属する外国人に過ぎなかった。白人が征服者として臨んだ中南米やフィリピンなどの場合と違って、上下関係がシナでは逆さだったのである。

このような状況下での布教は大変だったようで、大きな事件も起きています。次に紹介するのは前出の『CHINESE CULTURE HOMEPAGE <http://www.yutopian.com/>』『Early Chinese Christian』からの引用です。ただし和訳は原田によります。

Nanjing Missionary Case (1616 A.D.)

The conflicts between Chinese customs (like Confucianism and ancestor worship) and the Catholic doctrine led to one of the biggest confrontations between the Chinese government and the Catholic movement. In the 44th year of Emperor Wenli (1616 A.D., Ming Dynasty), a high ranking official in Nanjing, called Shen Huai, advised the Emperor repeatedly that Catholicism should be banned for the following reasons. 1) Western missionaries were spies. 2) Catholicism taught Chinese not to respect parents and worship ancestors. 3) Western missionaries stole proprietary Chinese knowledge. 4) Catholicism practiced weird customs like Chrismation, baptism and allowed male and female followers to study in the same room (forbidden by the conservative Chinese society). Anti-Catholic officials second the motion, while Catholic officials like Xu Guangqi opposed. Shen Huai arrested dozens of missionaries in Nanjing, on July 21 and August 14 and questioned them relentlessly. Urged by the Anti-Catholic movement, Emperor Wenli passed a law on December 28, deporting all foreign missionaries back to their homeland. Missionaries like Didaco de Pantoja, were deported to Guangzhou and many were sentenced.

南京の宣教師の事件 (1616 年)
儒教や祖先の偶像崇拜等といった中国の風習とカトリック教義の対立は中国政府とカトリック布教運動との間の、最も大きいもの一つとされる衝突を招いた。万暦 44 年 (1616 年明代) 南京の政府高官 Shen Huai は皇帝に対して繰り返し、カトリックは次の 4 つの理由により、処罰されるべきだと助言した：1) 西洋の宣教師はスパイだ 2) カトリックは中国人に向けて両親を尊敬せず、祖先の偶像を崇拜しないよう、教えている 3) 西洋の宣教師は中国の知的財産を盗む 4) カトリックは降誕祭、洗礼、男女の学徒を同じ部屋で学ばせる (これは保守的中国社会においてはタブーだった)、等の異様な習慣に従っている。反カトリックの役人はこの策動に加勢し、その一方で徐光啓等カトリックの役人は反対した。7月21日と8月14日に Shen Huai は数十人の南京の宣教師を逮捕し、容赦なく問いただした。反カトリックの動きに煽られて12月28日、万暦帝は、すべての外国人宣教師を自国に送り返す法律を通した。Didaco de Pantoja などのような宣教師は広州に追放され、多くの宣教師は処罰された。

ここで言う「多くの宣教師は処罰された (many were sentenced)」という箇所の詳細はかなり酷いもだったようです。『マッテオ・リッチ、アルヴァーロ・セメード 中国キリスト教布教史 2 大航海時代叢書 (第II期) 9 川名公平訳、矢沢利彦訳・注』にはこの件に関する詳し

い記述があります。同書 pp. 523-524 から引用します。

二 沈灌の迫害（南京教案）

南京での反キリスト教の動きは、禅宗僧侶蓮池（沈株宏）が『四天説』を著して仏教の優越を説くなどすであつたが、宣教師の逮捕という事態は、蓮池の弟子といわれる南京礼部侍郎沈灌（しんかく）が先鞭をつける。

沈灌が一六一六年宣教師の駆逐を請上奏文を呈したのは、かつて徐光啓・楊廷筠（いん）の両信者進士が沈の面前で、抗弁する余地のないほど彼の信仰する偶像を攻撃したので、キリスト教に対する敵意をいよいよ強くもつようになったこと、かねてから大学士に昇進したいという野望をもっていたので、自分の所轄範囲である礼教に対して、いかに情熱をもっているかを示すことによつて皇帝の関心を惹こうとしたこと、南京からイエズス会員たちを追放するために仏教僧侶から一万両の提供を受けたことなどによるという。

万曆帝は二度に亘る沈灌の上奏に何の返答もしなかったが、礼部尚書兼東閣大学士方從哲は沈灌の要請を受け、皇帝の勅裁を仰ぐことを省略したまま、宣教師を逮捕せよという命令を諸省に送つた。一六一六年九月一日教会にあつたヴァニーニヨは二名の信者とともに投獄されたが、病床にあつたセメードは、やはり病氣であつた鍾鳴仁とともに遅れて投獄された。

一方、沈灌があらゆる方向から北京に働きかけた結果、一六一七年二月一四日宣教師たちをマカオに追放する上論が下つた。南京にこの命令が到着するや、ヴァニーニヨ、セメードらは法廷にひき出され、審問を受けた。一同は首に縄をつけられており、セメードは身体が弱つていたので一枚の板の上に乗せて運ばれた。沈灌はひと通りの取調べを終えると、「おまえたちは邪教を説いたのであるから死刑に処すべきところであるが、皇帝の仁慈によつて生きることが許された。各自に一〇の笞打ちを加えた上で郷里にかえすことにする」と宣言した。ひどく衰弱しているセメードは笞刑を免れたが、ヴァニーニヨは一か月の重傷を負つた。また洪武岡の住院は没収されて公けの用途に使われることになった。

二人は死刑の判決を受けた囚人を移送する時に使用する狭い木の籠におしこまれ、首には鎖を、手には手錠をかせられ、髪を梳くことも許されず、ボタンをちゃんとかけない衣服を着せられて、四月三〇日に牢獄から役所に送られた。ここで彼らは鉄の鎖につながれ、その鎖には封印が施された。護送官はこの籠を囚人が食事をとる時と寝る時意外には覆いでおおつておくよう命ぜられた。こうして兩人は三〇日間言語に絶する辛苦をなめながら広州まで運ばれた。この市で再び同様の審問が行なわれ、数日後北京からやはり逮捕されて護送されて来たパントーハ、デ・ウルシスとともにマカオに送られた。この四名はマカオではべつに監禁もされず、ここのコレジオに住んだ。彼らはいずれも再入国の志を抱いていたが、パントーハとデ・ウルシスは翌年死亡した。

沈灌は一旦失脚したのち北京礼部尚書となると、一六二二年山東省の民衆反乱を契機に、民衆反乱、白蓮教、キリスト教の三者を結びつけて、迫害を再開した。

引用文中の「セメード」は『大秦景教流行中國碑に就いて』に登場した手紙の著者セメドと同一人物です。彼も、この事件に際してマカオに追放になった宣教師の一人だったわけです。では今度はセメドについて『マッテオ・リッチ、アルヴァーロ・セメード 中国キリスト教布教史2 大航海時代叢書(第二期) 9川名公平訳、矢沢利彦訳・注』pp. 261-263 から引用します。

一 セメードの経歴

アルヴァーロ・セメードは一五八五年ポルトガルのニゼア Nizea に生まれ、一七歳でイエズス会修練院に入り、一六〇八年ゴアへ向かった。一六一三年中国に入国し、同年南京に語学研修のため赴いたが、まもなく沈灌の迫害に会い、マカオに追放された。しかし名前と顔が比較的知られることの少なかった彼は、名を謝務禄から魯德照と改め、三年後の一六二〇年に再入国した。ちなみに『聖朝破邪集』に掲載されている南京教案の会審記録にはセメードのことを「謝務禄は顔が紅白色で、眼がおちくぼんでおり、鼻がとがり、黄色の鬚(あごひげ)をもち、自供によると三二歳で、大西洋人であり、多耳篤(ドクトル)の学位を有する」と記している。

再入国後は多年浙江省、ことに杭州に住み、有力な信者である進士楊廷筠(ようていじん)の保護のもとに新しい信者を獲得する一方、江西・江南の信者を訪問した。その後嘉定、上海と移動し、一六三〇年までの数年間は、陝西・山西両省で布教した。その間一六二四年六月一〇日に司祭となり、一六二八年には「大秦景教流行中国碑」を見に西安へ赴いている。

一六三〇年イエズス会チナ副管区の会計係になった彼は、一六三六年に、中国布教にとって何がもつとも必要かを上司に説明し、また新人の派遣を乞うためにローマに派遣されることになった。一六三七年マカオを出帆し、四〇年ポルトガル着、四二年ローマ入りした。

ローマでは熱烈な中国行き希望者が数多く応募したが、彼はイタリア人シナーモ Francesco Sinamo、フラマン人ラゴート Ignace Lagote のふたりだけを伴って一六四四年に出発した。なお同時に六人からなるべつの宣教師の一団がポルトガル人モーラ Luiz Moura の案内でポルトガルを確かに出発したのだが、そのうちで中国で働いたのはスモゴレンスキー(Nicolas Snogolenski 穆尼各(ぼくにかく))だけである。このひとの仲間の五人も、セメードが同伴したふたりもどうなったかはまったく知られていない。

セメードがローマを発った一六四四年は、清が首都を北京に定めた年であり、再入国した中国は明末清初期の戦乱のさなかであった。彼はマカオで数年間チナ副管区長を務め、一六四九年には広州住院(レシデンシア)のサンビアーゾ(Francesco Sambiasso 畢(ひつ)方濟)の死にともない、その跡を継いだ。この住院はもともとサンビアーゾが明の永明王(桂王)の死のために奔走して、マカオから三〇〇名にのぼる外人部隊を救援のために派遣した礼として、一六四六年に開くことができたものであったが、早くも翌年には清兵に占領された。しかし彼は旧知の役人のとりなしで死を免れた上、住院略奪に対する賠償を受け、そこに留まることを許されたのであった。これを引き継いだセメードも、永明王や母后、

皇后のために肇慶に赴いてミサを挙げ、新しい宣教師の派遣を約束するなどした。これらの女性はこの時同道したコフレル (andreas-Xavier Koffler 瞿安德) の指導で熱心なカトリック信者となった。

一旦この地を去った清軍は一六五一年再度広州を占領した。住院で死を覚悟していたセメードは、ある隊長が彼を質に身代金を得ようと考えたため、幸いにも殺されずに捕虜となった。さらにその時、別の隊長付の奴隷にキリスト教徒がいたため、セメードが湯若望の兄弟であると上申し替えた。湯若望 (アダム・シヤール Adam Scall von Bell) は満州人の間で、数学者、曆法家として尊敬されていたので、司令官が釈放を命じ、彼は住院に戻ることが許された。健康回復のため一度マカオに行き、晩年は清の地方統率者の好意を得、広州で過ごした。一五六八年七月 (もしくは一〇月) 死亡した。

一六二〇年に中国への再入国を果たしたものの、儒教と祖先への偶像崇拜という中国の伝統とキリスト教が相容れないものだ、という国内の考え方はそう容易に無くなるものではなかったであろう。そんな折に起こった大秦景教流行中国碑の発掘。大唐の時代からキリスト教が中国に入っていたことの証となるこの石碑が、宣教師達にとつてどれほど都合のよいものであったかは想像するに難くありません。

『大秦景教流行中国碑に就いて』は、この碑の建立について

同じくネストル教の信者か、若くば僧侶で、西暦八世紀の後半に、中央アジアの王舎城、即ちバルク (Balkh) から来て、唐に登庸されて、光祿大夫・朔方節度副使・試殿中監に出世した、伊斯 (洋名イザドブジド Izaduzid?) という人の出資によつて、この記念碑を建て (以下略)

と述べています。つまり**大秦景教流行中国碑は寄贈されたものだった**わけです。この「寄贈」ということと、前述の徐光啓の名前の半切「詳余古曠遺禮」、つまり

余計なことを詳しく言うが、その昔、贈り物など贈ったことは無いぞ。
(あばいて言い広められるのを苦しむ)

を合わせ考えると、大秦景教流行中国碑は李之藻によつて偽造されたものだ、という疑いがとても強くなります。ここで注意しなければならないのは、徐光啓という名前が、李之藻によつて作られたということはまず考えられない (ただし絶対に考えられない、という保証を私は得てはいませんが)、ということですが、つまり李之藻が徐光啓の名をヒントに思いついた策略の可能性がある、ということですが、李之藻が洗礼を受けたのは1610年のことです。李之藻の洗礼よりも前に入国しているロンゴバルディ龍華民 (1597年来華) の名前の反切に暗号が確認できなかったのに対し、李之藻の洗礼よりも後に入国したテレンツ鄧玉函 (1621年来華) の名前の反切に暗号が確認できたこと、そして鄧玉函という名前の解説がその総ての反切を用いた、言うなれば完全なものであったのに対し、徐光啓の名前の解説が「姑黄」を余す不完全なものだったことは注目に値します。同様な不完全さは利瑪竇にも当てはまります。彼の名前が完全に解説されるためには、「竇」||「穴」+「士四貝」というオプシジョンが不可欠だったわけですが、ここで、李之藻の洗礼よりも後に入国したもう一人の宣教師の名前について反切を採って調べてみましょう。

ロ―羅雅谷

「Jacques Rho, 1593-1638 年、イタリア人、1622 年に来華」

「羅」は良何切と憐知切と郎佐切、「雅」は於加切と語下切と牛加切、「谷」は古祿切と愈玉切と盧谷切。

羅 雅 谷

良何於加古祿
憐知語下愈玉
郎佐牛加盧谷

驚くべきことに、この宣教師の場合は「良何於加古祿」「憐知語下愈玉」「郎佐牛加盧谷」の3つとも、解読可能なのです。現時点では「良何於加古祿」と「憐知語下愈玉」についてのみ解読しておきます。「郎佐牛加盧谷」の解読が最も驚嘆させるものなのですが、これについては『封印を継承する者たち(2)』において述べたいと思います。

良何於加古祿について

← 良何於加古祿

↑

← 良何於加古祿

← 良何於加古祿

← 賢人は何を古い記録に加えるのか

憐知語下愈玉について

← 憐知語下愈玉

↑

← 憐知語下愈玉

← 玉愈下語知憐

← 玉愈下語曰知憐

← 天子は、いよいよお言葉を下す。憐れみを知れ、と。

「賢人は何を古い記録に加えるのか」からは、石碑の碑文全部が偽造されたのではなく、あら

はじめ記されていた何らかの碑文に書き足すかたちでの偽造であつたことがわかります。「天子は、いよいよお言葉を下す。憐れみを知れ、と。」からは、この石碑「発掘」を契機に布教を盛んにし、最後には皇帝にまで布教しよう、という魂胆だつたことがわかります。実は以前に得ていた「責」の反切「緇洗切」は、「緇洗」＝「僧侶が問う」と解せます。このことは宣教師の漢名の反切から「賢人は何を古い記録に加えるのか」という問いかけ等が得られることと符合します。次の『封印を継承する者たち(2)』では、いよいよ石碑の解説に取り組みわけですが、その前にもう少し徐光啓に「語って」もらいましょう。

徐 光 啓

詳余古曠遺禮

余計なことを詳しく言ってしまうが、その昔、贈り物など贈ったことは無いぞ。

(あばいて言い広められるのを苦しみ)

における「詳余」は、「余」＝「余計なこと」を詳しく述べる、という意味のわけですが、この「余」にはあと2つの意味が込められているのです。「余」は「スコップで土を押し広げる様十八(分散させる)」の会意文字ですが、この会意事態が、つまり「土を掘る」という状態を示しています。つまり

「詳余」

＝『余』を詳しく述べる」

＝『土を掘る』を詳しく述べる」

＝「発掘(された碑)について詳しく述べる」

となるのです。

また、先の解説における我々にとつての「余」は、

「余六」＝「余F」＝「Rose cast f of f」＝Francis Bacon

だったわけですが、このことを用いると

詳余古曠遺禮

Francis Bacon の「余」を詳しく言つが、その昔、贈り物など贈ったことは無いぞ。

となります。Francis Bacon の収賄事件は有名です。彼が賄賂を受け取つたが、実際にはその見返りは果たさなかつた、ということ。この「見返りは果たさなかつた」ということが、

その昔、贈り物など(責いはしたものの)贈った「余」は無ごぞ。

という少々苦しい弁解になるのです。この場合、「古」＝「その昔」という語よりも、

以前に、贈り物など(貰いはしたものの)贈ったことは無いぞ。

という近い過去の表現の方が適切にも思えますが、それをあえて「古」としてはばからないのは、要するにこの「責子」から繋がった暗号が解読されるのはどうせずっと後の時代だろう、と李之藻が考えているからなのでしょう。(以下、『封印を継承する者たち(2)』に続く)